

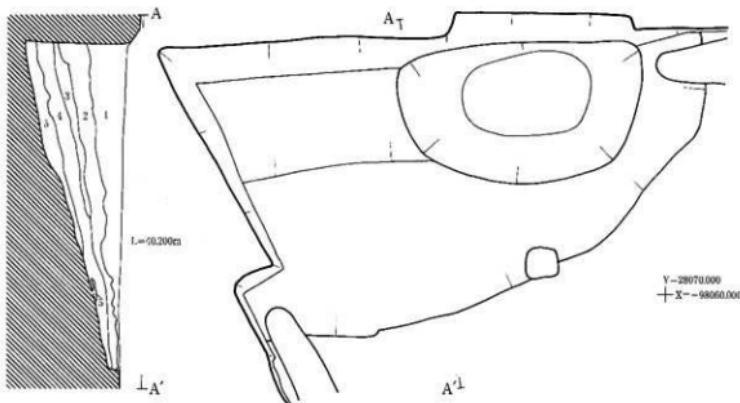
#### (4) その他・時期不明

##### i) 土壙跡

##### SX0130 土壙跡（第157図・写真図版83）

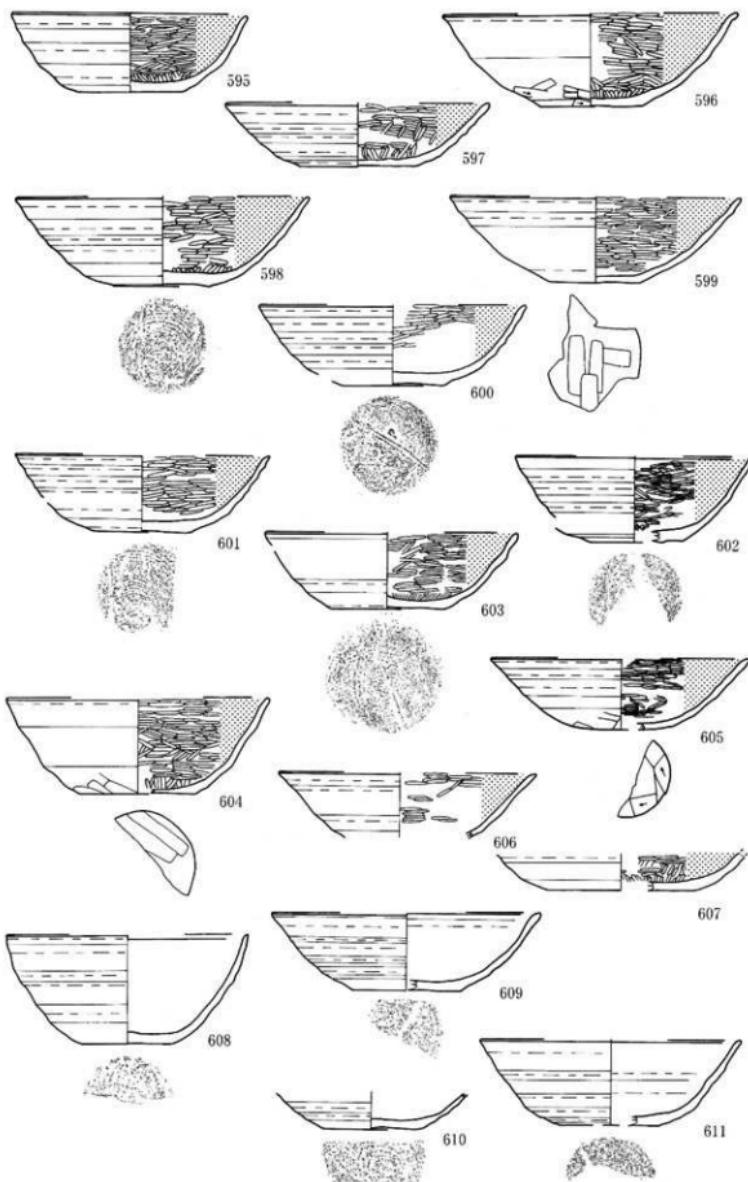
調査区北西隅に検出した東西 6.3 m × 南北 5m 以上の土壙跡である。北と西の調査区外に続く。埋土からは遺物の出土が比較的多く、溝跡 SD0131 との位置関係から当初池跡かと考えていたが、埋土の中層からビニールひもが出土したこと、昭和に近くの道路工事のために土取りをしたという話を聞いたことから、その際の搅乱壙であると判断した。

**出土遺物**（第158・159図・写真図版105・106） 搅乱壙にも拘わらず遺物は多く、土師器、須恵器、須恵系土器、石製品、鉄製品がある。土師器壺は半数以上が底部全面不定方向ケズりで、糸切り無調整は少ない。内面黒色、ミガキ手法は他の例と同様であるが、602 は口縁部が連弧状、595 と 597 は斜位と横位ミガキの組み合わせである。595 の底部は回転ヘラケズリ。596 と 598 は口径 17.8 ~ 18.1cm の大楕形式で、前者は底部全面ケズリ、後者は糸切り無調整である。600 の底部外面には一条のヘラ描きがある。須恵器杯 609、610、608 は糸切り無調整で、前 2 者は胎土、焼成、手法が近似し、後者は焼成不良の楕形式である。須恵系上器壺 611 は口径 16.0cm の楕形式となる。612 は長さ 10cm の砥石状石製品だが、一面中央とその裏面片側に寄ったところには穿孔しようとした痕跡がある。具体的な用途は不明。613 は長さ 7.8cm のフック状鉄製品である。

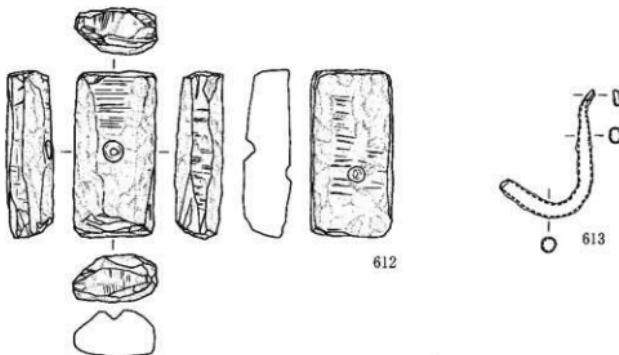


1. HIRAYAMA Ware 黒色、黒土粒、小石、土壁付合む。褐色土ブロック多く含む。軽性なし。しまり非常に大。
2. 19Y844 砂合土。焼化灰粒、無土粒、小石、土壁付。比較的多く含む。軽性なし。しまり非常に大。
3. 19Y834 黒色土。焼化灰少々含む。軽性なし。しまり非常に大。
4. 19Y834-4-6に於ける褐色土。褐色土。焼化灰粒、無土粒、小石含む。黄褐色土ブロック多く含む。軽性なし。しまり非常に大。
5. 19Y835 黄褐色土土壁に 19Y822 黑褐色土がブロック状に入る層。軽性わずかにあり。しまりある。

第157図 SX0130 土壙跡



第158図 SX0130 土壌跡出土遺物 (1)



第159図 SX0130 土壌跡出土遺物（2）

No.	出 土 地	器 種	上径 cm	底径 cm	高さ cm	底 溝	柄 上	底成	色 質	測 定		回収場所	発 現	備 考	
										外 囲	内 围				
595	SX0130 墓土	上縁鋸刃	14.4	6.2	4.9	横輪ハラゲ ズリ	密	普通	に古い黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黒色處理	158	105		
596	SX0130 墓土	中縁鋸大輪	18.3	8.2	5.7	ケズリ	やや密	普通	灰黄	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黒色處理	158	106		
597	SX0130 墓土	上縁鋸杯	16.0	7.0	3.9	不明	やや密	普通	灰黄	ロクロ	ミガキ後黒色處理	158	105		
598	SX0130 墓土	上縁鋸大輪	17.8	7.6	5.5	回転系切	やや密	普通	灰白	ロクロ	ミガキ後黒色處理	158	105	画面側	
599	SX0130 墓土	中縁鋸杯	17.8	8.7	5.3	ケズリ	密	普通	に古い黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黒色處理	158	105		
600	SX0130 墓土	上縁鋸杯	16.2	6.0	5.0	回転系切	密	圓い	に古い黄緑	ロクロ	ミガキ後黒色處理	158	105	底部へら書き	
601	SX0130 墓土	上縁鋸杯	15.0	5.8	4.8	回転系切	密	普通	に古い黄緑	ロクロ	ミガキ後黒色處理	158	105		
602	SX0130 墓土	中縁鋸杯	16.0	6.0	5.3	回転系切	やや密 右斜面	普通	浅灰青	ロクロ	ミガキ後黒色處理	158	105		
603	SX0130 墓土	上縁鋸杯	16.0	6.9	4.7	ケズリ	密	普通	灰黄	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黒色處理	158	105	外周手離れ	
604	SX0130 墓土	上縁鋸杯	16.0	7.0	5.9	ケズリ	やや密	普通	に古い黄緑	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黒色處理	158	105		
605	SX0130 墓土	中縁鋸杯	15.0	8.2	4.5	ケズリ	やや密 右斜面	圓い	浅灰青	ロクロ・ケズリ	ミガキ後黒色處理	158	106		
606	SX0130 墓土	中縁鋸杯	16.7	—	4.0	—	青 黄 赤	普通	浅灰青	ロクロ	ミガキ後黒色處理	158	106		
607	SX0130 墓土	上縁鋸杯	—	9.0	2.0	回転系切	密	圓い	灰黄	ロクロ	ミガキ後黒色處理	158	106		
608	SX0130 墓土	中縁鋸杯	14.7	6.0	6.7	回転系切	やや密 小石付	普通	浅灰青	ロクロ	ロクロ	158	106		
609	SX0130 墓土	中縁鋸杯	16.0	8.5	4.8	回転系切	やや密	圓い 内に凹	灰 青	ロクロ	ロクロ	158	106		
610	SX0130 墓土	中縁鋸杯	—	9.0	2.0	回転系切	やや密	圓い	に古い 赤褐色	ロクロ	ロクロ	158	106		
611	SX0130 墓土	濃曲高士脚杯	16.0	6.2	5.2	回転系切	粗 小 片	普通	浅灰青	ロクロ	ロクロ	158	106		
No.	出 土 地	器 種	上径 cm	底径 cm	厚さ cm	重 量 g	材 質	底	写 真 回 数	その 他					
612	SX0130 墓土	鐵芯か?	10.0	5	2.8	265.15		159	106	両面に穴					
613	SX0130 墓土	不明鉄製品	7.8	3.7	0.9	346.09	鐵	159	106						

SK0156 土壌跡（第160図・写真図版83）

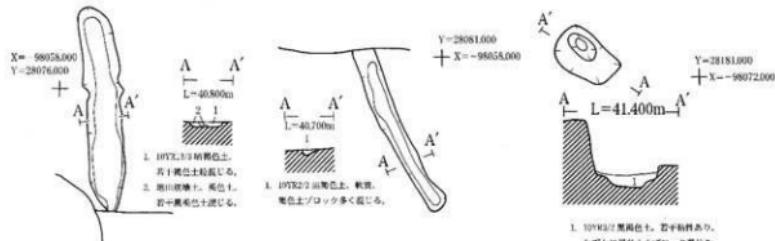
住居跡 SI0140 の煙道と重複する。上端は東西 0.45m × 南北 2.5m で、T ピットの形態を示すが、深さは 5cm と浅い。埋土は暗褐色土、SI0140 より古いものである。出土遺物はない。

SK0157 土壌跡（第161図・写真図版84）

B 区中央部にあり、上端は東西 0.25m × 南北 2.2 m と、SK0156 と同様 T ピットに近い形をしている。しかし幅が狭く、深さは 10cm であることから、単なる塹か、畑地耕作時に関わる跡とも考えられる。埋土は黒褐色土である。出土遺物はない。

### SK01134 土壙跡（第162図・写真図版84）

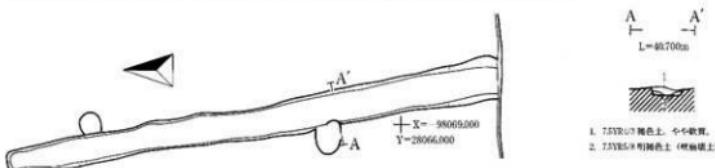
F区南端に検出した、東西0.5m×南北0.8m、深さ35cmの土壙跡である。木根跡かと思われる。



### ii) 溝跡

#### SD0139 溝跡（第163図・写真図版84）

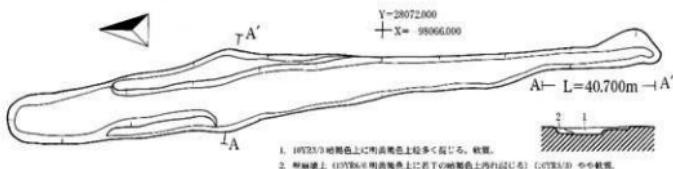
調査区西端に検出した、幅50cmのごく最近の溝跡である。埋土は褐色土。



第163図 SD0139 溝跡

#### SD0141 溝跡（第164図・写真図版84）

同じく最近のもので、風倒木痕跡と重複する。埋土は暗褐色土である。



第164図 SD0141 溝跡

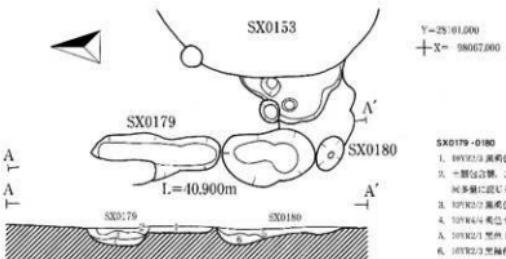
### iii) その他

#### SX0179（第165図・写真図版85）

TピットSK0173の南に重複する不整形の土壙跡である。開口部は東西0.55m×南北1.55m、深さは20cmである。

#### SX0180（第165図・写真図版85）

古代井戸跡SX0153の西に検出した、開口部東西0.65m×南北1.05mの細長い土壙跡で、深さは20cmである。



第165図 SX0179・0180

**SX01117 (第166図・写真図版85)**

Tピット SK01105とTピットSK01106の間に検出した、開口部東西1.05m×南北1.2m、深さ20cmの土壤跡である。

**SX01118 (第167図・写真図版85)**

E区にあり、開口部東西0.85m×南北1.2m、深さ10cmの浅い土壤跡である。住居跡SI01111の北壁を一部破壊している。

**SX01119 (第168図・写真図版86)**

E区中央部にあり、開口部東西0.8m×南北0.9m、深さ5cmである。

**SX01122 (第169図・写真図版86)**

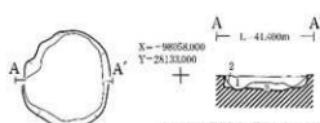
E区のSX01119の北にあり、開口部東西1.2m×南北0.7m、深さ25cmである。

**SX01123 (第170図・写真図版86)**

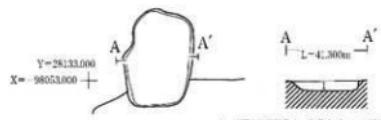
E区にあり、開口部東西1.1m×南北0.8m、深さ10cmである。住居跡SI01112に重複し、住居跡を壊す。以上のうち、SX01117～01119・01122・01123の埋土は黒褐色土だが、底面は不整形、比較的新しいグループに属する一群である。

**SX0179・0180**

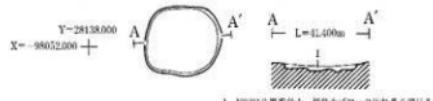
1. 10V3/2 黒褐色土。褐色土内れ多く混じる。
2. 土質は白銀土、10V3/2 黑褐色土に地土粘土。炭化粒、白色粘土ブロック、河多量に混じる。
3. 10V3/2 黄褐色土。白色粘土ブロック多く混じる。地上も認める。
4. 10V4/4 黑褐色土。黒褐色土内れ若干混じる。
5. 10V2/1 黑褐色土。黒褐色土に褐色土ブロック内れ多量に混じる。
6. 10V2/2 黑褐色土と褐色土の混合土。



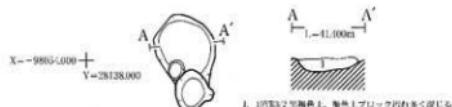
第166図 SX01117



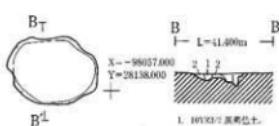
第167図 SX01118



第168図 SX01119



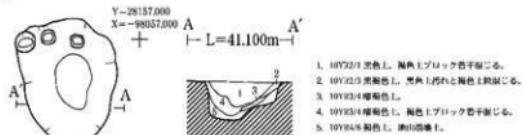
第169図 SX01122



第170図 SX01123

### SX01127 (第171図・写真図版86)

E区住居跡 SI01114のすぐ東側で検出した、開口部東西1.2m×南北1.55m、深さ20cmの土壙である。埋土は暗褐色土が主体である。



第171図 SX01127

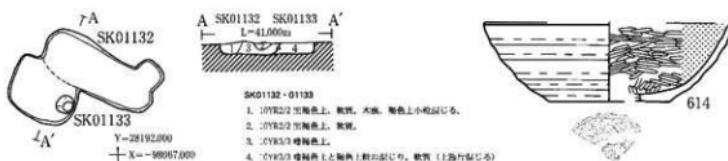
### SK01132 (第172図・写真図版87)

G区東部に検出した、東西0.65m×南北0.75m、深さ10cmの不整形の土壙跡である。埋土は黒褐色土と暗褐色土、南側でSK01133と重複し、SK01132が新しい。

### SK01133 (第172図・写真図版87)

東西0.85m×南北0.7m、深さ10cmの土壙跡である。北側にSK01132との重複があり、埋土も同じである。遺物が少量出土している。

**出土遺物** (第172図・写真図版106) 614は焼のよい土師器坏である。



第172図 SK01132・01133

No.	出土地	基盤	口幅cm	奥幅cm	基高cm	表層	胎土	造成	色調	測量		回数	平均	備考
										外面	内面			
614	SK01133	土師器坏	0.52	0.75	4.5	凹面切	直	圓い	にぶい黄焼	ロクロ	ミガキ後黑色地底	172	106	

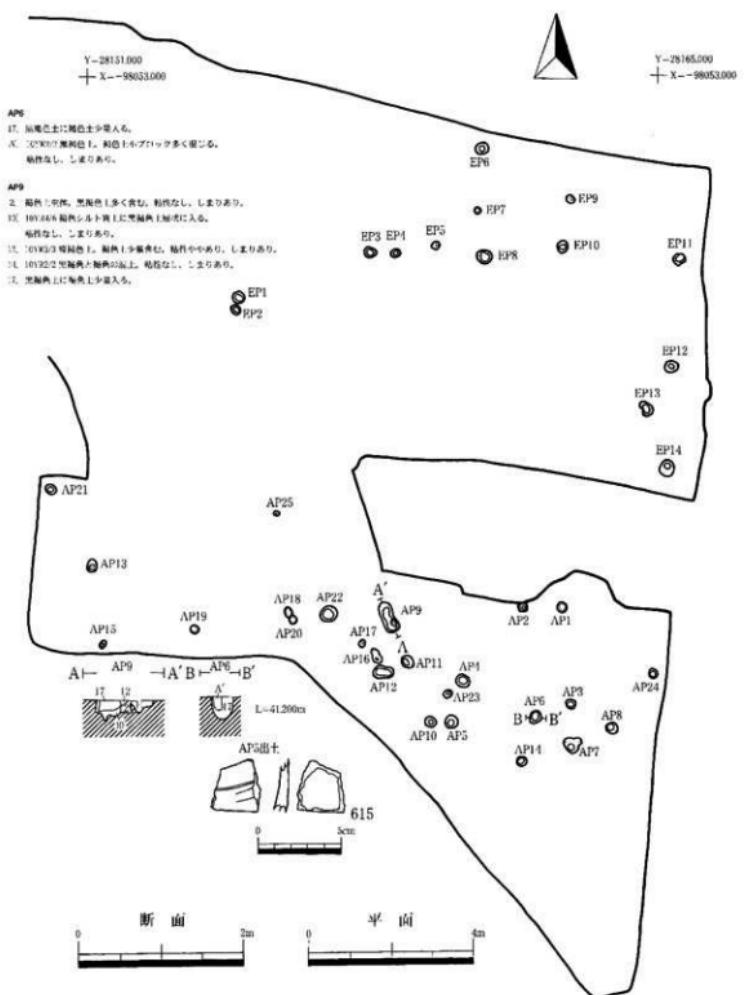
### (5) 柱穴状ピット群 (第173・174図・写真図版87)

柱穴状ピットは、地区ごとにその地区名を頭に付けて番号を振っていた(例: AP、BP・・)。B区では多数のピットを検出したが、E区にはほとんどない。またB区でも中央部に多く、北・東西に向かって少なくなる、というように場所によって密度に大きな差がある。これはSD0190と第13次発掘調査SD06、第20次発掘調査SD0104に開まれた内側・外側の違いによるものと考えられる。B区の柱穴状ピットの大半が掘立柱建物跡を構成するが、現地において組み合わせることができなかった柱穴状ピットも多い。これらのピットのデータは以下の一覧表に示す。柱穴の埋土はパターン化し、表中では記号で示した。柱当りを持つピットについては図にスクリーントーンを貼り、表に柱当りの径と埋土を記号で示した。

柱穴状ピットは基本的に掘り方は円形で、下端が上端より広くなることはないが、DP22、DP23は上端から内傾して下端に至る。

**出土遺物** (第173・174図・写真図版106) いくつかの柱穴内から遺物が出土しており、図示できたものを掲げる。AP 5では内面に暗緑色の自然釉の掛かった須恵器胴部片615があり、B P 256からは616がある。外面平行叩き、内面磨り消しである。B P 416の土師器坏617は糸切り無調整の非内黒で、

同じ柱穴から水晶の切子玉破片 618 が出土している。B P 464 の焼成不良の須恵器坏 619 の内面には焼成後に刻まれた 2 本の平行する線刻がある。



第173図 A・E 区柱穴状ピット群

（）は推定塗・残存苔苔

No.	出土地	基 準	口径 cm	底径 cm	高さ cm	底 深	底 深	施 成	色 調	断 面		半 面		回収番号	回 収 番 号	備 考
										外 面	内 面	外 面	内 面			
615	AP5	上層器表	-	-	(12)	老	圓錐	にぶい表面	ヘラケズリ			123	106			

第4表 A・E区柱穴一覧表

単位: cm

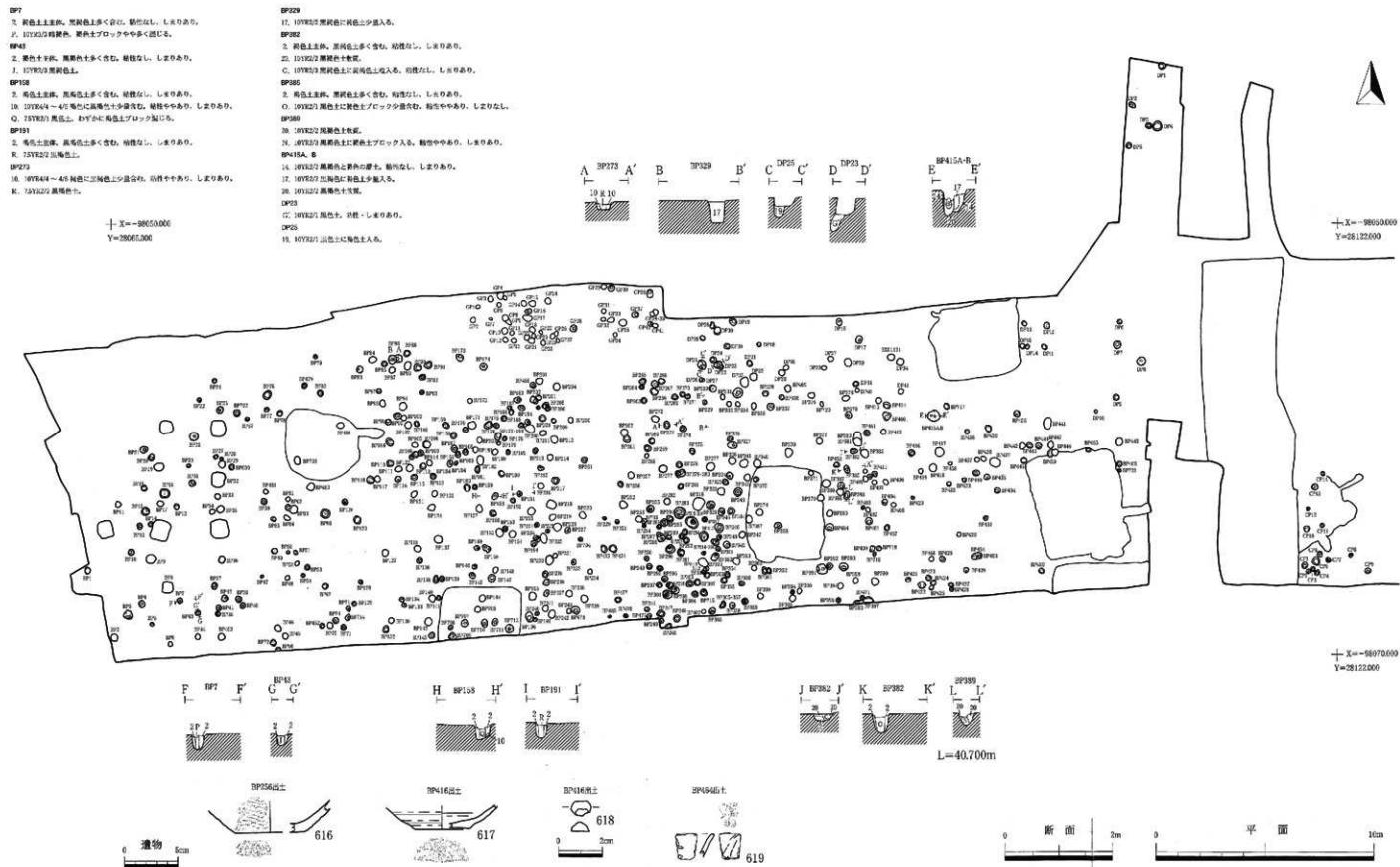
No.	開口部径	底部径	深さ	柱当り径	掘り方埋上	柱当り埋上	備考
AP 1	25 × 23	17 × 17	21		8 炭		
2	23 × 23	18 × 18	34	10	8		
3	23 × 23	15 × 14	3	36	8		
4	31 × 33	21 × 22	49		8		
5	33 × 31	19 × 17	29		8		615 出上
7	44 × 39	17 × 15	29		8		
8	27 × 28	20 × 19	11		13		
10	31 × 27	14 × 12	49	50	8 炭	1 炭	
11	30 × 30	17 × 12	24		7		
12	48 × 30	38 × 16	27		8		
13	29 × 23	12 × 18	14	13	14		
14	24 × 24	15 × 17	16		14		
15	18 × 12	9 × 4	45				
16	50 × 45	11 × 5	24		8		
17	18 × 18	8 × 8	10		14		
18	19 × 26	12 × 20	9		14		
19	22 × 21	16 × 17	12		14		土器片出土
20	21 × 23	17 × 18			14 炭・焼		土器片出土
21	24 × 25	12 × 17	20		14 炭・焼		
22	41 × 40	26 × 25	34	6	14 炭		
23	22 × 18	11 × 10	16		14		
24	25 × 21	16 × 14	17				
25	13 × 15	3 × 4	11		14		
EP 1	39 × 38	14 × 14	36	15			SI01114 と重複
2	21 × 24	14 × 16	41				SI01114 と重複
3	25 × 22	12 × 8	13		12		
4	19 × 17	12 × 12	12		14		
5	20 × 20	6 × 6	15		14		
6	28 × 27	12 × 11	33		17		
7	16 × 18	11 × 14	13		17		
8	31 × 32	17 × 17	16		17 炭		
9	18 × 20	6 × 6	21				
10	26 × 26	13 × 11	8		19		
11	29 × 26	16 × 14	32		17		
12	33 × 28	15 × 15	36		17		
13	31 × 33	18 × 22	20		17		
14	34 × 36	32 × 34	33		17		底面に礫あり

**柱穴群註記**

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色と4/4 黒褐色の混土。粘性・しまりあり。
2. 黒褐色土主体。黒褐色土多く含む。粘性なし、しまりあり。
3. 10YR5/6 黄褐色砂質土に黒褐色土ブロック少量入る。粘性ややあり、しまりあり。
4. 10YR5/6 黑褐色土に黒褐色土ブロック入る。粘性なし、しまりあり。
5. 10YR5/6 黄褐色土に黒褐色土が入る混土。粘性ややあり、しまりあり。
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色と10YR5/6 黄褐色の混土。粘性なし、しまりあり。
7. 黑褐色と黄褐色の混土。粘性なし、しまりあり。
8. 10YR2/3 黑褐色に黄褐色土少量入る。粘性なし、しまりあり。
9. 黑褐色土に黄褐色少量入る。
10. 10YR4/4 ~ 4/6 黑褐色に黒褐色土少量含む。粘性ややあり、しまりあり。
- 10'. 黑褐色シルトに黒褐色土層状に入れる。粘性なし、しまりあり。
11. 10YR4/6 黑褐色土と暗褐色の混土。粘性ややあり、しまりあり。
12. 10YR3/3 暗褐色土。褐色土少量含む。粘性ややあり、しまりあり。
13. 10YR3/4 暗褐色とにぶい黄褐色の混土。粘性なし、しまりあり。
14. 10YR2/2 黑褐色と褐色の混土。粘性なし、しまりあり。
15. 10YR2/2 黑褐色土少量入る。粘性なし、しまりあり。
16. 7.5YR3/4 暗褐色に黒褐色土ブロック入る。粘性・しまりややあり。
17. 10YR2/2 黑褐色に褐色土少量入る。
18. 暗褐色と褐色土の混土。粘性なし、しまりあり。
- 18'. 暗褐色と褐色土の混土。粘性あり。
19. 10YR2/1 黑褐色土に褐色土入る。
20. 10YR2/2 黑褐色土軟質。
  
- A. 10YR2/2 黑褐色土に褐色土ブロック少量含む。粘性・しまりあり。
- A'. 10YR2/2 黑褐色土に褐色土ブロック多く混じる。粘性なし、しまりあり。
- B. 10YR3/3 暗褐色土。粘性なし、しまりあり。
- C. 10YR2/3 黑褐色土に黄褐色土粒入る。粘性なし、しまりあり。
- D. 10YR3/2 黑褐色と黄褐色の混土。粘土質土。粘性・しまりあり。
- E. 10YR2/3 暗褐色土に黄褐色土ブロック少量入る。粘性なし、しまりあり。
- F. 10YR2/3 黑褐色土に黄褐色土ブロック少量入る。粘性なし、しまりあり。
- G. 10YR2/1 黑褐色土。粘性なし、しまりややあり。
- G'. 10YR2/1 黑褐色土。粘性・しまりあり。
- H. 10YR3/3 暗褐色土に黄褐色土粒少量入る。粘性なし、しまりあり。
- I. 10YR2/3 黑褐色土に黄褐色土ブロック入る。粘性なし、しまりあり。
- J. 10YR2/3 黑褐色土。粘性なし、しまりあり。
- K. 10YR5/6 黄褐色土主体に暗褐色が入る混土。粘性なし、しまりあり。
- L. 10YR2/2 黑褐色土に黄褐色土少量入る。粘性・しまりややあり。
- M. 10YR2/2 黑褐色土。褐色土ブロック含む。粘性・しまりややあり。
- N. 10YR2/3 黑褐色土に褐色土ブロック入る。粘性ややあり、しまりあり。
- O. 10YR2/1 黑褐色土に褐色土ブロック少量含む。粘性ややあり、しまりなし。
- P. 10YR3/3 暗褐色土。褐色土ブロック多くに入る。
- Q. 7.5YR2/1 黑褐色土に褐色土ブロック少量含む。
- R. 7.5YR2/2 黑褐色土。

( ) は推定径。残存基質

No.	出土地	基種	口径cm	底径cm	岩高cm	底部	斜上	地成	色調	溝		回取番号	回取	備考	
										外面	内面				
616	HP256 桟当内	圓錐型	-	-	6.0	(2.0)	タタキ	やや密	4(1) 茶灰	タタキ	すりぬし	174	106		
617	HP416	土塊型	-	-	(2.0)	(2.0)	回転名切	密	普通	普通	ロクロ	174	106	海内黒	
619	BP961	圓錐型	-	-	(2.0)	-	やや粗	普通	4(1) 茶青	ロクロ	ロクロ	174	106	内面に薄緑	
No.	出土地	基種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	材質	固	孚立壁板	その他の					
618	BP416	石製玉	0.7	0.9	0.45	0.38	水熱	174	106						



第174図 B・C・D・G区柱穴状ピット群

第5表 B・C・D・G区柱穴一覧表

単位: cm

No.	開口部径	底部径	深さ	柱当り径	掘り方埋土	柱当り埋土	備考
BP 1	24 × 25	22 × 23	13				
3	36 × 29	30 × 10	23	34	1		酸化土含む
4	29 × 28	16 × 16	22				
5	22 × 16	10 × 10	4		1		
7	23 × 24	13 × 12	29	10			
10	28 × 25	16 × 14	31	17	2	A 炭・焼	
12	21 × 24	20 × 20	12	12	2	A	
13	20 × 26	16 × 14	22		2	A	
14	19 × 20	14 × 16	9			A	
15	36 × 34	14 × 13	30	16			
16	23 × 23	22 × 18	11		2	A 炭	酸化土含む
18	40 × 40	38 × 32	11	21	2	A	
20	30 × 30	20 × 10	21	14	3	C 炭・焼	土器片出土
21	34 × 22	16 × 15	34			C 炭	土器片出土
22	24 × 24	8 × 8	25	14	3	D	
23	40 × 38	14 × 14	38		1		
24	19 × 20	18 × 14	18			D	
25	27 × 27	14 × 13	16	12	5	C	酸化土含む
27	16 × 15	16 × 16	29			C 炭・焼	
28	14 × 14	10 × 9	17		1		
30	18 × 12	10 × 8	13		3		
31	27 × 26	14 × 18	32	19	1	B	酸化土含む
32	65 × 59	12 × 12	29	16			
33	25 × 25	22 × 20	16				
37	27 × 30	16 × 16	45			E 炭	
38	24 × 24	18 × 18	8		5	E	
39	24 × 24	14 × 18	27			C	土器片出土
40	23 × 22	18 × 12	19				土器片出土
41	14 × 15	14 × 8	12	10	5	E	
42	25 × 23	12 × 10	28			C	
43	22 × 25	15 × 16	24	14			
47	14 × 12	12 × 6	19			G'	
49	25 × 24	20 × 17	15	13	5	D	
50	14 × 13	10 × 10	22			F	
53	20 × 19	16 × 16	20	12	6	G	
55	17 × 17	10 × 10	3				
56	22 × 12	19 × 10	16		2		
57	18 × 16	16 × 14	14			C	
59	25 × 25	16 × 16	19			A	土器片出土
61	22 × 22	5 × 4	1			E	
62	37 × 28	18 × 17	18			A	
65	21 × 19	18 × 16	13			E	
66	134 × 121	15 × 14	50	33		A 焼	土器片出土
69	29 × 23	22 × 16	10				
71	24 × 24	10 × 14	26	18		G'	
72	23 × 22	23 × 20	21				土器片出土
73	21 × 22	14 × 12	11	15	4	E	土器片出土
74	20 × 26	13 × 13	15	13		E 炭	土器片出土
76	36 × 35	24 × 28	17				
77	17 × 18	16 × 13	18			B	土器片出土
78	20 × 25	18 × 18	13			A	土器片出土
82	20 × 23	18 × 20	20	13	4	F	
86B	24 × 27	13 × 11	51			I	土器片出土
88	21 × 25	20 × 18	18		7		
90	31 × 28	24 × 24	17		5		

No.	開口部径	底部径	深さ	柱当り径	掘り方埴土	柱当り埋土	備考
91	32×29	24×22	14			E	
92	23×22	21×16	21	19	4	F	
93	17×16	12×12	14			E	
97	18×16	14×13	15		7		
98	23×22	17×16	16		7		
99	23×27	19×15	50	15	8	B	土器片出土
103	26×28	15×21	30	15			
104	32×30	28×20	31	11	7	C炭	
106	29×32	28×26	23			D	
107	22×23	16×16	20			C炭・焼	
108	23×24	20×22	13		4	E炭・焼	
109	30×20	14×13	14	17		I.	
110	28×27	26×22	26		4	C	
113	24×23	19×21	24				
115	24×22	16×16	11				
116	24×26	14×6	11				
118	30×35	27×24	22	14	5	H炭・焼	
119	25×22	14×12	27				
120	30×35	24×28	24			I	
122	23×25	10×7	9				
125	121×133	114×122	6	37			
128	30×26	10×8	21	15	5	E	
129	26×22	16×11	10			E	
132	24×25	20×20	16	15			
133	26×25	14×12	22	17	4	G	
134	18×27	18×18	1			A	
136	20×22	18×16	16	25	4	C	
138	23×31	16×22	12			H	
139	21×23	16×14	10			H	
141	20×24	16×14	18		4		
143	27×28	13×15	15			H炭	
145	28×30	14×11	26	13	8	C炭・焼	
146	21×18	12×12	22		4	F炭・焼	
147	33×30	19×16	12				
149	24×18	14×4	20			F'	
150	34×20	10×10	14		4	F	
153	22×20	18×16	16				
156	27×27	22×18	22	14		I	
158	31×30	22×22		16			
159	28×24	18×16	17	18	5	H炭	
160	28×32	20×26	17		6		
161	30×30	18×24	11		7		
163	18×21	16×8	16			F焼	
164	12×13	6×4	9				
165	21×24	16×16	20			C	
166	20×22	16×16	16		4	C炭・焼	
167	26×30	18×14	25		6		
168	26×27	22×18	29	15	4	I	
169	29×24	23×20	16		7	I	
170	24×20	16×13	24			A炭・焼	
173	26×22	16×14	59		8		
174	29×32	16×12	30			C焼	土器片出土
175	31×29	27×26	19		4	H	
176	26×25	12×11	16			C焼	
177	28×33	17×23	18			E	
178	25×22	9×10				C	
183	29×29	14×16	28			F焼	土器片出土

No.	開口部径	底部径	深さ	柱当り径	掘り方埋土	柱当り埋土	備考
184	30×32	19×17	28	30	4	C炭・焼	
186	16×20	15×18	27			C	
187	20×19	14×13	8			C	
188	24×25	16×20	19			G	
190	22×24	20×20	19			F	
191	25×24	17×14	27				
192	18×16	14×16	12		9	E	
194	25×25	20×18	13			H	
196	35×41	20×21	44	17			
197	21×26	6×5	22	15			
198	24×23	14×16	13			G	
199	21×24	12×13	29			I炭・焼	土器片出土
202	30×30	18×17	32			J炭・焼	土器片出土
206	21×21			10	4		
207	16×18	6×7	26			D	
208	30×30				4	K炭・焼	
209	22×22	18×16	16		3		
213	20×24	15×16	21	15	4	G	
215	25×21	18×12	23		5	H	
221	21×18	6×7	29	13			
223	19×16	12×11	13			H	
224	26×33	14×10	14	17	4	F	
227	23×26	6×12	29	12	7	L	
229	13×12	8×11	20				
232	24×23	11×10	31			J炭・焼	
235	24×28	16×14	10	15			
236	28×29	19×14	40		4		土器片出土
237	26×26	6×7	18	16			
240	26×24	12×12	16	18			
244	23×19	20×13	19		15炭・焼		
245	24×21	18×20	29		7	F炭	
246	21×24	14×11	23		4	L炭	
247	24×26	22×20	22			C炭・焼	土器片出土
249	24×22	18×16	18	13			
250	18×18	8×10	40				土器片出土
251	16×16	6×6	15				
254	15×15	11×12	9			A炭・焼	
255	32×28	15×12	26			L炭	
256	29×23	16×17	5	10		J	616出土
258	18×18	16×17	9				
259	17×16	20×20	13		4		
260	27×22	22×20	12	18			
261	30×28	23×19	31	12	4		土器片出土
263	23×22	19×18	15		4	A炭	
264	20×17	13×12	17		4	C	
265	27×28	20×14	21		4	C	土器片出土
266	30×27	26×21	20		8		土器片出土
268	27×24	20×16	26			L炭	
269	26×25	21×16	17		8	A	
270	24×24	16×14	14		4		
271	20×20	15×14	13		4	J	
273	28×30	18×21	11				土器片出土
274	26×25	19×18	16	15	8	G	
275	23×26	18×16	14		7	L	
277	34×30	17×21	26				土器片出土
278	29×25	18×17	15		7		
279	25×29	19×12	16			J炭・焼	

No.	開口部径	底部径	深さ	柱当り径	掘り方埋土	柱当り埋土	備考
280	24 × 26	18 × 12	13		8		
281	22 × 25	19 × 16	11			I	
283	50 × 48	26 × 19	14			A炭・焼	土器片出土
284	28 × 21	18 × 17	37	9	8		
285	26 × 27	12 × 20	26	11	1	B焼	
286	20 × 17	13 × 13	16			J炭	土器片出土
287	21 × 19	20 × 16	17		4		
288	18 × 17	10 × 8	58				
289	22 × 19	16 × 18	20	14			
290	39 × 35	9 × 8	42	16	11	A炭・焼	
291	32 × 34	8 × 9	13		10	L	
292	26 × 28	16 × 20	10			J炭・焼	
293	21 × 23	16 × 16	15			L炭	
294	22 × 22	12 × 18	26				
295	21 × 20	14 × 17	10		10	J	
296	26 × 26	16 × 18	7		5		
297	22 × 20	16 × 16	14		10	N	
298	27 × 21	13 × 20	13		5		
299	34 × 32	10 × 11	38		9	E	
301	36 × 35	10 × 10	45		7		
302	16 × 16	11 × 13	19				
303	27 × 25	20 × 6	24				
304	27 × 21	22 × 17	13	15	10	L	
305	20 × 17						BP357と重複
306	31 × 30	26 × 17	17	18	10	N	
307	27 × 26	23 × 21	9				
309	22 × 24	18 × 18	14		11	B	
310	24 × 19				4	I炭・焼	
311	25 × 23	12 × 12	33				
312	26 × 23	21 × 20	12				
313	34 × 27	28 × 20					BP312と重複
314	18 × 18	10 × 8	11			I	
315	37 × 38	16 × 7	17	16		J炭	
316	51 × 50	12 × 12	22	25	10	L	
317	21 × 21	6 × 4	21		2		
318	24 × 26						
319	30 × 23	18 × 14	15				
321	37 × 35	13 × 18	34			L炭・焼	
323	22 × 24	19 × 20	7		4	L	
324	25 × 25	10 × 11	21			I	
327	40 × 39	12 × 13	37	17	11	A炭・焼	
328	19 × 15	18 × 9	27		10	L	
329	22 × 22	13 × 16					
330	33 × 31	27 × 25	16			L	
333	37 × 32	18 × 22	25	34	4	G	
336	22 × 21	18 × 16	6	14	11		
337	34 × 28	13 × 14	32	16	11	H炭・焼	
344	20 × 21	16 × 18	17			M	
345	25 × 33	11 × 12	37			G	
346	29 × 36	20 × 19	29	16	8	L炭・焼	
348	21 × 29	9 × 9	21			J	
349	30 × 32	18 × 19	34	13	10	N炭	
350	32 × 39	10 × 9	13		7炭		
351	26 × 27	11 × 11	18	16		L炭	
352	30 × 39	5 × 6	14			L	
354	23 × 20	16 × 20	14		10	C炭	
355	25 × 25	18 × 18	17				

No.	開口部径	底部径	深さ	柱当り径	掘り方埋土	柱当り埋土	備考
356	22×21	19×8	14		11		
357	25×25	18×22	12	20		C	
358	27×23	10×6	35			I炭・焼	
359	30×28	8×8	31				
360	24×23	16×18	13				
361	21×22	16×22	16		16		
362	23×24	19×20	13				
364	17×15	1×6	17			J炭・焼	
366	17×21	12×12	11			I炭・焼	
369	25×21	22×17	5				
372	14×12	9×9	6				
373	24×18	20×13	10				
375	23×23	18×17	3	13	2	I	
379	19×18	16×14	40		10	C炭・焼	土器片出土
382	34×26	26×12	17				
383	37×37	16×20	14				
385	32×28	14×20	35				土器片出土
387	26×28	18×18	44	16	10	C炭・焼	
389	23×36	13×18	25				
391	51×40	7×6	27		11炭・焼		土器片出土
392	19×19	18×16	37			J	土器片出土
393	34×32	20×16	24	19	10	J	
394	21×20	10×13	19			J	
395	20×21	14×13	8			N	
396	32×18	38×16	8				
397	48×26	32×24	7				
401	30×29	18×17	21	16		N炭・焼	
403	16×12	14×17					
404	30×24	8×6	19	16	11炭		
408	23×24	16×12	27				
411	25×26	14×13		11			
414	33×30	22×18	21		11		土器片出土
415	59×51	20×17	44		1		
416	26×27	20×19	27			A炭・焼	617出土
420	14×12	9×7	10			B	
421	24×24	16×10	19	11	10	J	
422	30×28	8×26	18		11		酸化土含む
423	27×22	18×16	12			N	
424	24×25	19×18	10		11		
425	21×19	16×16	8				
426	19×20	12×16	14		8		
427	17×18	16×13	7				
428	22×23	9×11	7		3		
429	22×18	9×10	17		11		
430	21×20	16×16	6				
431	22×21	8×10	13			E炭	土器片出土
432	22×21	18×16	14		11		
433	19×19	14×12	11		11		
434	14×14	14×12	24			A	
435	27×22	12×10	21		5	B	
438	22×22	13×18	17			N炭	
439	27×26	20×22	22		11		
440	29×23	16×16	22		2	C炭	
443	23×26	19×18	24		12	J	
444	26×27	14×16	20	16	1		土器片出土
445	25×26	20×18	31	13		A	土器片出土
450	24×26	16×14	22		15		

No.	開口部径	底部径	深さ	柱当り径	掘り方埋土	柱当り埋土	備考
452	20 × 20	15 × 15	15	13	4		
454	30 × 29	20 × 14	31				土器片出土
455	26 × 28	14 × 16	20		4		
457	22 × 23	16 × 13	15		N		
459	32 × 32	28 × 28	23				
460	34 × 24	24 × 24	22		11	N 炭・焼	
461	24 × 24	20 × 16	16	11	10	I	
462	25 × 22	17 × 17	13		11		
463	19 × 25	18 × 13	16	8	10	F	
464	28 × 26	21 × 28	14	9	10	N 炭・焼	619 出土
465	30 × 16	25 × 14	30				
466	23 × 24	15 × 13	15	13	7	C 炭・焼	
467	26 × 25	23 × 10					
471	18 × 18	12 × 13	14				
473	27 × 24	22 × 24	7	10			
474	30 × 32	27 × 28	17	11			
475	18 × 20	12 × 16	17			L 炭・焼	
476	21 × 20	12 × 12	28			C 炭・焼	
477	30 × 28	16 × 17	14				
478	34 × 32	20 × 16	16		2 炭	E	
479	19 × 20	16 × 18	17			E	上器含む
485	16 × 14	10 × 9	12				
600	23 × 25	17 × 15	23			B 炭・焼	土器片出土
701	34 × 28	28 × 20	23			I 炭・焼	土器片出土
702	31 × 30	20 × 18	15		4	C	
704	15 × 14	11 × 8	18			L	
705	24 × 22	21 × 19					
708	21 × 21	12 × 12	15				
709	40 × 32	25 × 21	15			L	
710	35 × 30	17 × 13	12			M 焼	
713	38 × 36	16 × 10	37	17		M 炭	
714	26 × 24	16 × 13	26			C	
715	32 × 30	11 × 8	13		8		
716	22 × 21	16 × 6					
717	29 × 27	21 × 18	17		12		
718	26 × 14	14 × 12	24				
719	19 × 14	11 × 8	36				
721	18 × 17	12 × 11	9			C 炭	
CP 1	25 × 26	18 × 18	21		18	H	
2	20 × 18	16 × 13	24	12	14	C	
3	19 × 17	13 × 12	32			N	
4	21 × 21	16 × 13	14	10	17	J	
5	32 × 34	24 × 23	22	23	18	N	
6	20 × 21	12 × 15	30	14	11 炭	N 炭	
7	22 × 22	16 × 13	21	13	2	N	
8	17 × 14	14 × 11	19	11		C	
9	24 × 23	13 × 16	20	17		C	
10	24 × 27	20 × 18	18		8 炭		
11	18 × 18	13 × 10	10		17 炭		
12	16 × 17	6 × 8	9		18		
13	28 × 27	24 × 19	21	12	14 炭		
14	19 × 20	6 × 10			9		砂質
DP 1	31 × 26	21 × 22	23		8		
2	29 × 27	20 × 16	34		17	J	
3	25 × 18	17 × 15	16		5		
4	38 × 37	34 × 30	14		12		
5	25 × 21	18 × 17	14		8		土器片出土

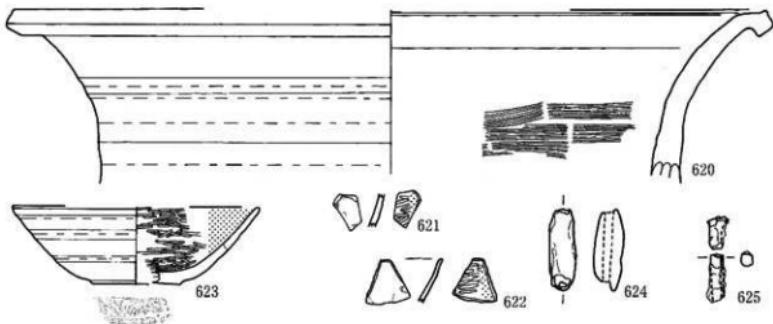
No.	開口部径	底部径	深さ	柱当り径	掘り方埋土	柱当り埋土	備考
8	30×30	10×8	36		18'		
10	15×15	10×10	20			J	
11	22×21	17×16	23		12		
13	19×22	16×16	15	8	14	N	
15	21×23	18×19	29	18	17	J	上器片出土
16	23×30	11×10	24		12		
17	28×28	12×10	46		2	J	
18	13×14	11×12	14		12		
19	29×28	18×18	29	16	14		
20	23×23	13×13	5	16	17	J	
22	17×21	11×15	14		15		上器片出土
24	26×27	18×19	8		17		
25	34×37	20×18	15	21		N	上器片出土
26	13×18	10×14	14		18		
27	13×13	10×10	22		12		
28	22×23	18×17	11	13			
30	32×30	27×25	26	14	12	A	
32	29×28	21×20	21	13			
33	23×22	15×13	19				
35	42×35	33×28	21	17			
36	25×24	20×18	16	15			
37	19×17	14×13	25				
38	22×21	15×14	16				
40	18×17	13×13	20	9			
41	20×20	15×13	17				

No.	開口部径	底部径	深さ	柱当り径	埋土	備考
GPI	24×20					
2	24×25					
3	24×28					
4	30×29					
5	19×20					
6	23×24					
7	15×13					
8	31×29					
9	20×28					
10	29×31					
11	22×22					
12	24×24					
13	25×23					
14	26×25					
15	34×30					
16	33×25					
17	44×30					
18	29×27					
20	20×25					

No.	開口部径	底部径	深さ	柱当り径	埋土	備考
22	19×20					
24	27×29					
25	25×24					
26	20×21					
27	19×20					
28	33×32					
29	26×24					
30	30×29					
31	21×23					
32	24×23					
33	26×24					
34	20×21					
35	35×31					
36	29×35					
37	30×26					
38	20×23					
39	21×29					
40	23×21					

### (6) 遺構外出土遺物 (第175図・写真図版106)

遺物は少ない。E区中央付近の620は須恵器甕の口縁部である。621と622は土師器杯の破片で、ともに外面に墨痕をとどめる。同区出土の623は内黒の土師器杯で、見込みのミガキは5辺の単位で横ミガキされ、五角形を作る。ほかにB区中央から長さ5.0cmの土錐624、C区から鉄釘625が出土している。



第175図 遺構外出土遺物

No.	出土地	器種	口径cm	底径cm	厚さcm	式形	施土	焼成	色調	倒型		回復条件	備考	
										外面	内面			
620	E区検出	須恵器甕	148.0	—	11.0	—	—	—	やや粗 石高含	圓い	研磨灰	ロクロナヂ	ナヂ・小口既き 造り	175 106
621	E区検出	土師器杯	—	—	2.0	—	—	—	やや粗	圓い	灰青高	ロクロ	ミガキ後黑色處理	175 106 外面墨書き
622	E区検出	土師器杯	—	—	2.7	—	—	—	やや粗	圓い	にぶい緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	175 106 外面墨書き
623	E区検出	土師器杯	115.0	5.0	4.75	円板切羽	—	—	やや粗	圓い	にぶい緑	ロクロ	ミガキ後黑色處理	175 106
No.	出土地	器種	大きさcm	幅cm	厚さcm	重量g	材質	回	写真図版	その他				
624	B区中央剖面	土錐	3.0	1.1	1.8	13	土製	175	106					
625	表段	鉄釘	119	1.4	0.9	8.19	鐵	175	106					

## 4まとめ

本遺跡は縄文時代から平安時代、中世に至る複合遺跡である。主体は平安時代の集落跡であるが、縄文時代には陥し穴を用いた狩猟場、中世には館跡と、時代によりさまざまに利用されてきた土地であることが判明した。

縄文時代の陥し穴(Tピット)は、調査区B・D・E区から東西方向に21基検出した。規模は長さ2.5m~3.0m、幅0.3m~0.7m、深さ0.6m~1.2mである。形態は平面形がすべて南北方向に長軸をもつ細長いタイプで、底面の広狭の差で2つに類別できる。底面に小ピットなどの付属施設を窓わせるものは認められなかった。Tピットの配列は、東から西方に緩やかに下る地形の等高線に直交するかたちで、入りはあるがほぼ1m間隔で並列され、西端は調査区外方に広がる、旧天神川ないし低湿地帯に向かって落ち込むかたちとなっている。このことから東から西方に延びるTピットは、湿地帯に向かう獣道に直交するかたちで配列されたことがわかる。ただし、出土遺物がないため時期は特定できない。

平安時代の遺構には、竪穴住居跡16棟、土壙跡25基、井戸跡1基、溝跡3条、掘立柱建物跡1棟などがある。住居跡は、カマド煙道部を有するグループと、煙道部のないグループに分けられ、規模

も前者は一辺4m以上が多いのに対し、後者は一辺4m未満を主体とする。後者はまた須恵系土器を作出するグループである。竪穴住居跡SI0191床面から径30cm、深さ20cm、底面中央に径10cm、深さ20cmの小孔が穿たれたロクロビット1つを検出した。林前遺跡群では初の発見例である。上半部のビットにロクロ本体を据え、下方の小孔にロクロ中心軸（心棒）を通す構造と考えられる。床面北東部から白色粘土の塊も合わせて検出されており、本住居で粘土を使って土器作りが行われたことは確実であろう。ただし土器焼成などの生産遺跡は未発見である。

住居の造構で注目できるのが、SI0140である。規模は3.4m×3.25mの歪んだ隅丸方形を呈し、地山を掘りこんだ床面も深さ20～30cmと一定せず、住居に伴う柱穴もない。しかし壁の北東隅には長さ1m余の煙道部を掘り、先端部では深さ75cmの煙出し部を設けていた。反面、カマド本体は未構築で、火を焚いた形跡がない。このことから、本住居は建築途中で放棄されたと判断した。ただし造構のあり方から、林前遺跡における竪穴住居の建築過程があるいど推定できる資料となり得ることは成果の1つといえる。

土器溜り造構SK0133は、調査区西端寄りから掘立柱建物跡SB0144と接するようにして検出された東西に長い浅い土壙跡である。多量の土器が埋納されており、検出状況から使用済みの土師器壊を正立の状態で4～5枚ずつ重ねて置いたと推定できる。壊の総数は40枚以上ある。土壙四隅には各々径10～15cmの杭穴状の小柱穴が穿たれ、その状況から下端部の尖った杭状の小柱と推定される。すなわち土壙四隅には簡易なかたちの小柱が計4本立てられていたと復元でき、これは土壙に伴う施設の一つと解される。多くの一括土器の出土と四隅の小柱穴の存在を合わせ考えると、当造構は土器の廃棄に関わる祭祀施設と理解できる。

井戸跡SX0153は、径2.9m×2.45m、深さ1.4mの円形の素掘り井戸跡である。井筒や井戸枠などの施設は無く、底面に酸化鉄の集積面が観察されることから、本造構は天水を溜める目的で掘削された井戸と判断できる。林前遺跡群では古代の井戸の検出例は3例目である。

掘立柱建物跡SB0144は、調査区西端寄りの上器溜り造構SK0133の北側から検出された東西2間（総長5.378m）以上×南北2間（総長4.928m）の東西棟建物跡である。東妻の柱間寸法は北から2.541m、2.387mあり、桁行方向は東から2.593m、2.785mある。いま仮に東妻の方向の総長を16尺（8.25尺+7.75尺）とすると、1尺は30.80cmとなる。同じく桁行方向の総長を17.5尺（9尺+8.5尺）とすると、1尺は30.73cmとなる。これは1978年に林前遺跡南東部C地区発見のSB63掘立柱建物跡（東西2間〔総長5.305m=1尺/30.31cm〕×南北3間〔総長7.205m=1尺/30.02cm〕）よりわずかに小さく<sup>3</sup>、柱間寸法もやや間延びする傾向が認められ、SB63掘立柱建物跡より後出的であることを示すと考えられる。

出土遺物の種類は、土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、鉄製品、土製品、石製品などがある。器種別に見ると、土師器は壊・高台壊・皿・高台耳皿・鉢・片口土器・甕・小甕があり、壊・高台耳皿には内外黒色のB類土器もいくつかみられる。甕はロクロ成形が基本だが、非ロクロ成形がわずかにある。須恵器は量的に少ないが、壊・甕がある。須恵系土器は壊、灰釉陶器は小瓶がある。これらの土器群には、9世紀から10世紀前半代の年代が与えられる。

鉄製品では刀子が多く、ほかに鉄滓・釘状製品がある。土製品は羽口・土鍤・焼成粘土塊があり、石製品では砥石・石器剥片・磨石・石錐・玉などがある。うち磨石は支脚、砥石をはじめ二次的に転用される例が多い。

1) 新田 賢・伊藤博幸外「林前遺跡—区画整理に伴なう範囲確認調査—」水沢市文化財報告書第3集  
(水沢市教育委員会 1979)

墨書土器の出土例は比較的多いが、大半は土師器坏破片に墨痕を認めるいで、判読可能な例はきわめて少ない。判読できるものでは「財」「床」がある。また須恵器坏の墨書例は1点のみであった。

このほか線刻ある上器が若干みられる。住居跡SI0145からは、黒色土師器B類の高台耳皿が3点出土し、うち1点の耳部外面に波形の線刻がある。また住居跡SI0152から出土した土師器坏内面には5つの「×」の線刻がある。これらの線刻紋は、第20次発掘調査で出土した九字紋と同様の呪いの意味をもつという指摘がある<sup>3)</sup>。

中世の遺構には、堀跡1条、井戸跡1基、溝跡1条、掘立柱建物跡20棟などがある。今次調査発見の堀跡SD0190は、方形館の東辺を区画する堀跡で、北辺は第20次発掘調査の堀跡SD0104と、南辺は第13次発掘調査検出の堀跡SD06<sup>4)</sup>と接続し、全体的に「コ」の字プランを呈する堀跡となる。

規模は東辺長が芯々で63m、東西長約60mを測る。西辺は低湿地のところで切れる自然地形の縁辺部を利用し、堀は掘削しなかったと考えられる。堀の断面は、東岸の傾斜の緩い箱堀状を示す。堀の両岸上端周辺には、櫻列や土塁などの痕跡は認められない。

堀に区画される内部には井戸跡、溝跡、掘立柱建物跡がある。井戸跡は掘立柱建物跡が密集する東端部付近から検出され、径約1.3mの円形で、深さ2.7mある。井戸底には曲物などの施設はないが、下方に井戸枠が設置された可能性はある。SD0146溝跡は2時期に重複して、堀内部はほぼ中央を南北方向に延び、南で第13次発掘調査検出の溝跡SD08に続く。溝跡SD08はさらに南へ延び堀跡SD06北岸を破壊することから、堀内部ではもっとも新しい遺構である。

掘立柱建物跡は重複関係、建物方位などからa～eの5群に分けられる。個々の掘立柱建物跡の間数、総長、寸法、単位尺、方位などの計測値、および構造などの特徴については第1表に掲げた。ここで群ごとの特徴をまとめておく。

建物a群(SB1-1～1-6)はいずれかの側柱の方位が発掘基準線に一致するか、1°未満が基本で、一致しない場合でも側柱の振れが2°～3°前後を示すグループで、重複関係と建物構造からSB1-2・1-3・1-5とSB1-1・1-4・1-6の2小群に分かれる。SB1-2と1-6は平面形が相似形の東西棟である。SB1-5は西側に1間の庇が付く南北棟で、SB1-1南北棟とともにa群の中心殿舎を構成するものであろう。

建物b群(SB2-1～2-4・2-6)は建物方位が基準線に対して、7°～11°前後西側に偏するグループで、平面的にも側柱長短2辺が直角をなさなくなるものである。重複関係と建物構造からSB2-1・2-2・2-4とSB2-3・2-6の2小群に分かれる。SB2-6は南から2間に東西に間仕切りを持ち、さらに内部を南北に仕切って二分する南北棟である。b群の中心殿舎はこの1棟のみ推定でき、ほかは不明である。SB2-4建物跡はc群SB4-3掘り方に切られるので、b群はc群に先行する。

建物c群(SB4-1～4-3)は建物方位が基準線に対して、13°～15°前後西側へ偏するグループで、SB4-3建物跡がSB2-4掘り方を切ることから、c群はb群より新しい。SB4-3は三面庇付南北棟建物跡で、c群の中心殿舎と解される。SB4-1は規模の大きい東西棟である。

建物d群(SB5-2～5-5)は建物方位が基準線に対して、4°～5°前後西側へ偏するグループで、重複関係がないので、同時に4棟存在したと判断した。東側に3棟の南北棟を配し、西寄りに1棟の

2) 岡田保造氏の教示による。

3) 高橋千晶・佐々木千鶴子『水沢遺跡群範囲確認調査－平成8年度発掘調査概報－』水沢市文化財報告書第31集

(水沢市教育委員会 1997)

4) 前出註3) 文献47～48頁。

東西棟を配する構成である。建物跡の振れは、b群・c群より小さく、これより先行するグループと考えられる。

建物e群(SB3・6)は建物方位が基準線に対して、12°前後西側へ偏するSB3と、25°以上も東側へ大きく偏するSB6がある。建物方位からみても両者は時期を異にするとと思われ、SB6が後出的である。SB3の12°前後の振れは、b群とc群の間におさまる。

以上、建物方位と重複関係からみて、これらをまとめて、大きくは古い方から新しい方へa群→b群→c群の変遷が認められ、さらにa群とb群の間にd群が入る可能性がある。またe群SB3は現状ではb群・c群いずれとも決し難い。以上を再整理すると、a群→(d群)→b群→(e群SB3)→c群→(e群SB6)の変遷を想定できる。ただし、SB6建物跡の段階は、すでにa～d群の方形居館の時期とは質的に異なる建物段階と理解すべきであろう。

〔参考〕

水沢市文化財報告書第3集 「林前遺跡」	水沢市教育委員会	1979
第25集 「水沢遺跡群範囲確認調査」	同	1992
第30集 「水沢遺跡群範囲確認調査」	同	1996
第31集 「水沢遺跡群範囲確認調査」	同	1997
第33集 「水沢遺跡群範囲確認調査」	同	1999
第36集 「水沢遺跡群範囲確認調査」	同	2002



B区 調査前（東から）



C区 調査前（西から）

写真図版45 B・C区調査前



B区 終了全景（南から）



C区 終了全景（南から）

写真図版46 B・C区終了全景



D・E区 終了全景（南から）



F区 終了全景（東から）

写真図版47 D・E・F区終了全景



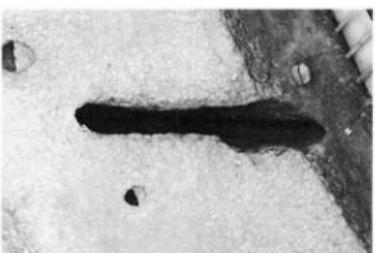
A区 終了全景（西から）



G区 終了全景（東から）



SK0155 断面（南から）



SK0155 全景（東から）



SK0158 断面（南から）



SK0159 断面（南から）



SK0160 断面（北から）

写真図版48 A・G区終了全景、Tピット SK0155・0158～0160



Tピット左から SK0158・0159・0160・0161・0162（南から）



SK0161 断面（南から）



SK0162 断面（南から）



SK0164 断面（南から）



SK0165 断面（南から）



SK0168 断面（南から）

写真図版49 Tピット SK0158～0162・0164・0165・0168



SK0166 断面（東から）



SK0173 断面（南から）



Tピット左から SK0164・0165・0166・0168・0173（南から）



SX01101 断面（南から）



SX01101 全景（北から）

写真図版50 Tピット SK0164～0166・0168・0173、SX01101



SK01102 断面（南から）



SK01102 全景（南から）



SK01104 断面（南から）



SK01105 断面（南から）



SK01106 断面（南から）



Tピット左から SK01104・01105・01106（南から）

写真図版51 Tピット SK01102・01104～01106



S10140 断面（東から）



S10140 断面（南から）



S10140 全景（西から）

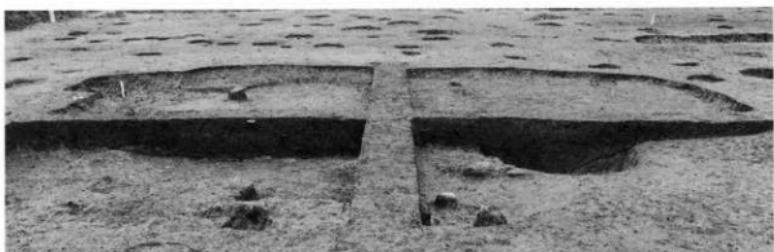
写真図版53 S10140 竪穴住居跡



SI0145 墓穴断面 (東から)



SI0145 全景 (北西から)



SI0150 墓穴断面 (東から)



SI0150 墓穴断面 (南から)

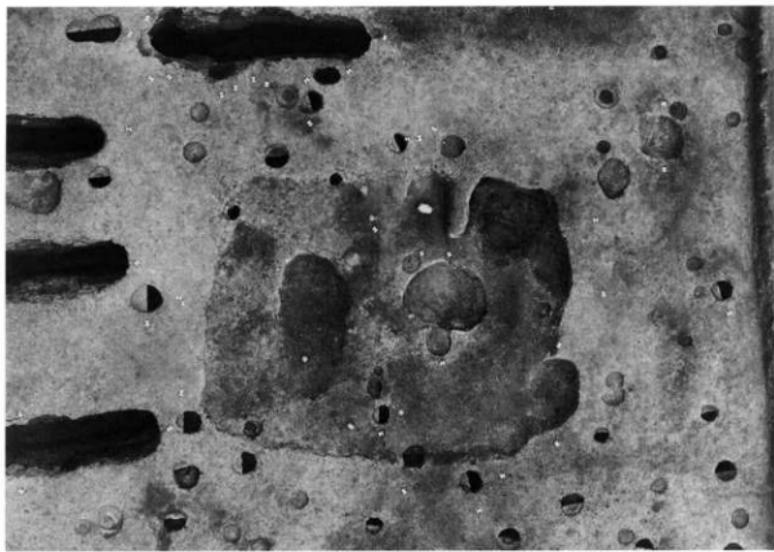


SI0150 K3 墓穴断面 (南から)



SI0150 K4 墓穴断面 (西から)

写真図版54 SI0145 竪穴住居跡、SI0150 竪穴住居跡（1）



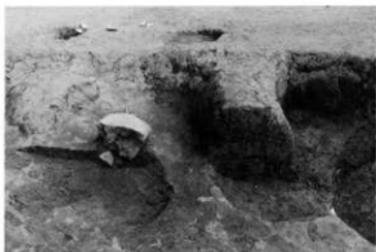
S10150、SK0154・0170 全景（西から）



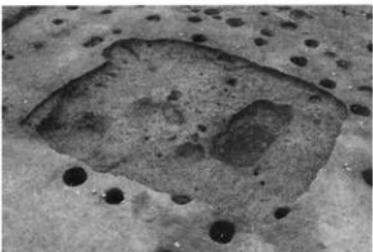
S10150 カマド全景（西から）



S10150 K2 断面（西から）

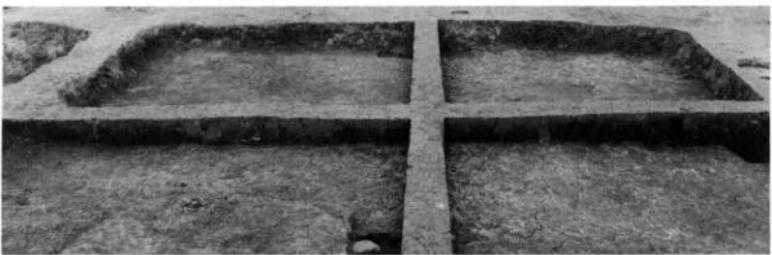


S10150 カマド袖断面（西から）



S10150 終了全景（東から）

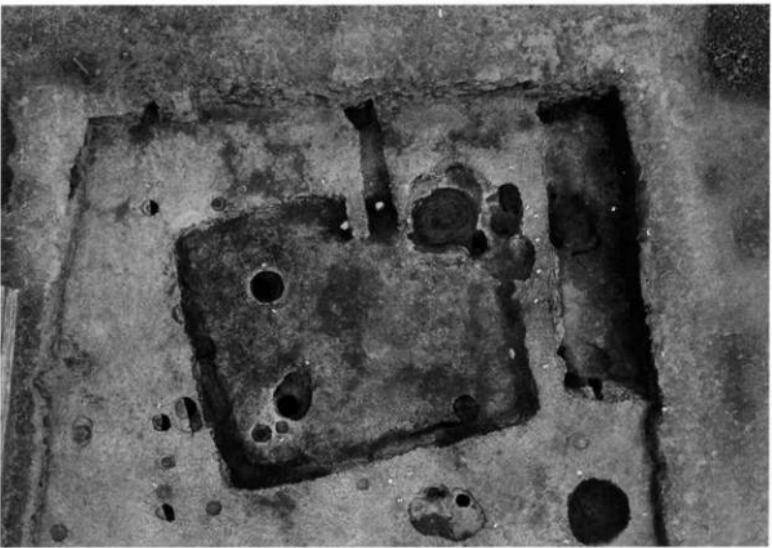
写真図版55 S10150 積穴住居跡（2）



S10151 断面（東から）



S10151 断面（南から）



S10151 全景（西から）

写真図版56 S10151 壁穴住居跡（1）



SI0151 煙道断面 (南から)



SI0151 カマド全景 (西から)



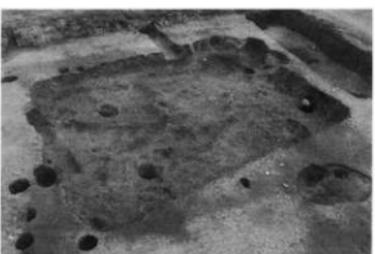
SI0151 ピットA断面 (南から)



SI0151 カマド袖 (西から)



SI0151 K1断面 (西から)



SI0151 終了全景 (北西から)



SI0152 断面 (東から)



SI0152 断面 (北から)

写真図版57 SI0151 竪穴住居跡 (2)・SI0152 竪穴住居跡 (1)



SI0152 全景（東から）



SI0152 K1 断面（東から）



SI0152 K2 断面（西から）



SI0191 断面（東から）



SI0191 断面（南から）



SI0191 煙道断面（南から）



SI0191 カマド（西から）



SI0191 カマド遺物出土状況（西から）

写真図版58 SI0152 積穴住居跡 (2)・SI0191 積穴住居跡 (1)



SI0191 全景 (西から)



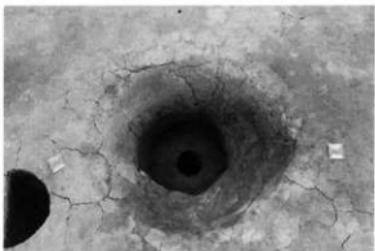
SI0191 カマド袖断面 (西から)



SI0191 K1断面 (西から)



SI0191 ロクロビット断面 (南から)



SI0191 ロクロビット全景 (北から)

写真図版59 SI0191 竪穴住居跡 (2)



SI0191 床面粘土全景 (西から)



SI0191 床面粘土断面 (西から)



SI0191 K2 断面 (西から)



SI0191 終了全景 (西から)



SI0192 全景 (西から)



SI0192 南カマド煙道断面 (西から)



SI0192 南カマド全景 (北から)



SI0192 東カマド煙道断面 (南から)

写真図版60 SI0191 壁穴住居跡 (3)・SI0192 壁穴住居跡 (1)



SI0192 東カマド袖断面（西から）



SI0192 K1 断面（西から）



SI0192 K2 断面（西から）



SI0192 終了全景（西から）



SI01100 断面（南から）



SI01100 断面（西から）

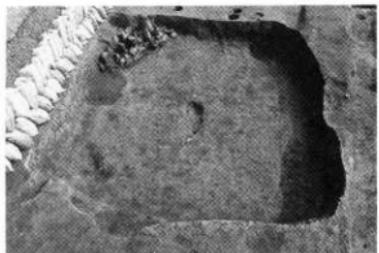


SK01125 断面（南から）



SI01100 煙道断面（南東から）

写真図版61 SI0192 壺穴住居跡 (2)・SI01100 壺穴住居跡 (1)・SK01125 土壙跡



SI01100 全景（西から）



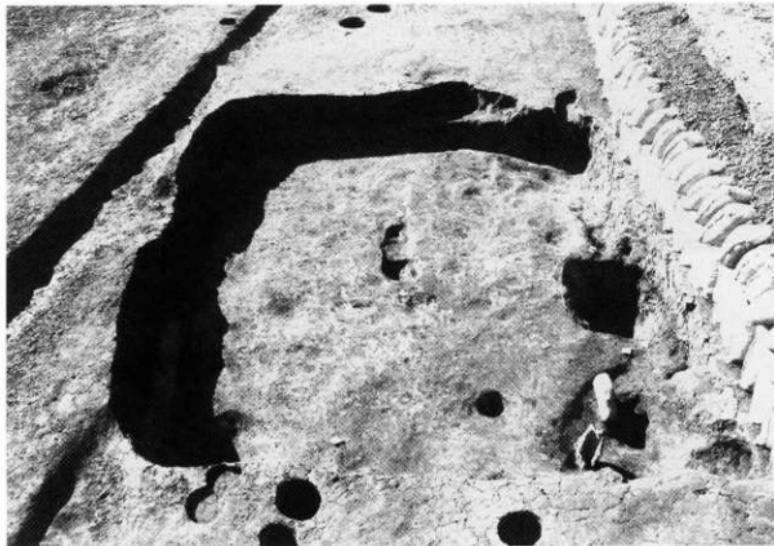
SI01100 カマド遺物出土状況（南西から）



SI01100 カマド遺物出土状況（東から）



SI01100 カマド煙道（南から）

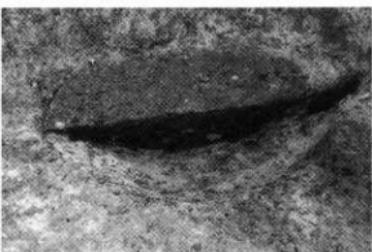


SI01100 終了全景（東から）

写真図版62 SI01100 壁穴住居跡 (2)



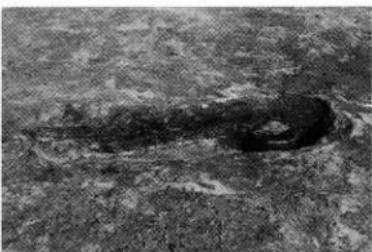
SI01100 カマド断面（南西から）



SI0110 K1 断面（西から）



SI01100 K2 断面（南から）



SI01100 p1 断面（南から）



SI01111 断面（南から）



SI01111 断面（西から）



SI01111 煙出し断面（南から）



SI01111 カマド全景（西から）

写真図版63 SI01100 壁穴住居跡 (3)、SI01111 壁穴住居跡 (1)



SI01111 カマド袖断面（西から）



SI01111 p1・2 断面（南から）



SI01111 全景（西から）



SI01111K1 断面（南から）



SI01111K2 断面（西から）

写真図版64 SI01111 壁穴住居跡（2）



S101112 断面（西から）



S101112 断面（南西から）



S101112 全景（北から）

写真図版65 S101112 竪穴住居跡（1）



SI01112 カマド断面（北西から）



SI01112 カマド全景（北から）



SI01112 カマド袖断面（北から）



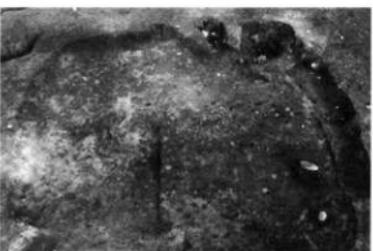
SI01112 K2 断面（北から）



SI01113 断面（南から）



SI01113 断面（西から）



SI01113 全景（西から）



SI01113 カマド断面（南から）

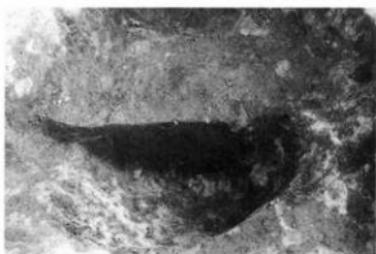
写真図版66 SI01112 積穴住居跡 (2) · SI01113 積穴住居跡 (1)



SI01113 カマド全景（西から）



SI01113 カマド袖断面（西から）



SI01113 K1 断面（西から）



SI01113 終了全景（西から）



SI01114 断面 A-A'（南から）



SI01114 断面 B-B'（東から）

写真図版67 SI01113 窪穴住居跡 (2)・SI01114 窪穴住居跡 (1)



SI01114 断面 C - C' (西から)



SI01114 全景 (南から)



SI01114 K3 断面 (北から)



SI01114 K3 遺物出土状況 (北から)

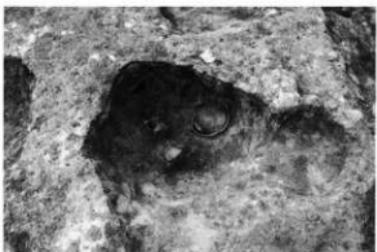
写真図版68 SI01114 壁穴住居跡 (2)



SI01114 K1 壁面 (東から)



SI01114 K1 全景 (東から)



SI01114 K2 全景 (北から)



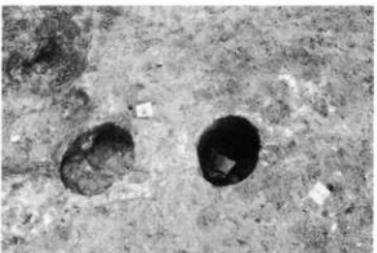
SI01114 灰釉陶器出土状況



SI01114 カマド全景 (西から)



SI01114 カマド袖断面 (西から)



SI01114 p1 (北から)



SI01114 終了全景 (西から)

写真図版69 SI01114 壁穴住居跡 (3)



SI01116 壁面 (南から)



SI01116 壁面 (西から)



SI01116 全景 (西から)



SI01116 終了全景 (西から)



SI01130 壁面 (西から)



SI011130 K1 壁面 (西から)



SI01130 カマド煙道断面 (北から)



SI01130 煙出し (南から)

写真図版70 SI01116 壁面・SI01130 壁面 (1)



SI01130 全景 (西から)



SI01130 カマド全景 (西から)



SI01130 カマド袖断面 (西から)



SI01130 終了全景 (西から)



SI01131 断面 (西から)

写真図版71 SI01130 積穴住居跡 (2)・SI01131 積穴住居跡 (1)



SI01131 断面 (南から)



SI01131 全景 (西から)



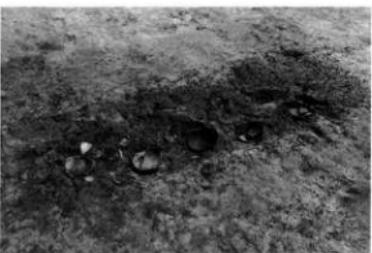
SI01131 K1 断面 (西から)



SI01131 終了全景 (西から)



SK0133 検出状況 (南東から)



SK0133 遺物出土状況 (北東から)



SK0133 遺物出土状況 (南から)

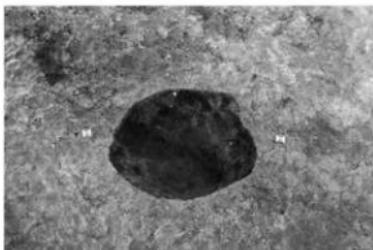


SK0133 終了全景 (南から)

写真図版72 SI01131 垂直穴住居跡 (2)、SK0133 土器溜り



SK0120 断面（南から）



SK0120 全景（南から）



SK0121 断面（南から）



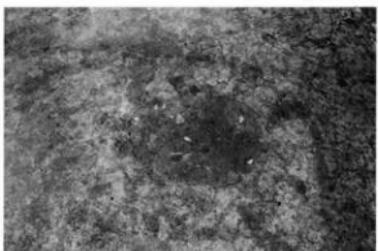
SK0121 全景（南から）



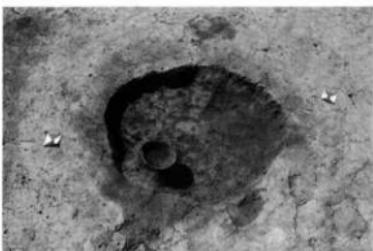
SK0122 断面（北から）



SK0122 全景（北から）



SK0134 検出状況（北から）

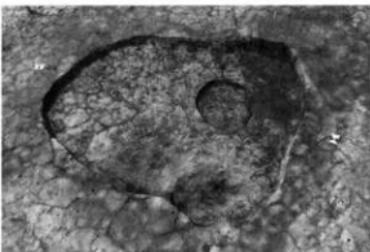


SK0134 全景（北から）

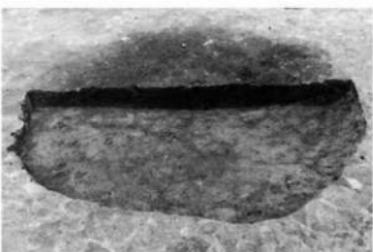
写真図版73 SK0120 ~ 0122・0134 土壌跡



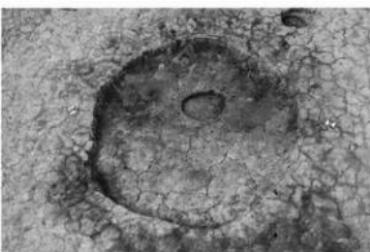
SK0135 断面（南から）



SK0135 全景（南から）



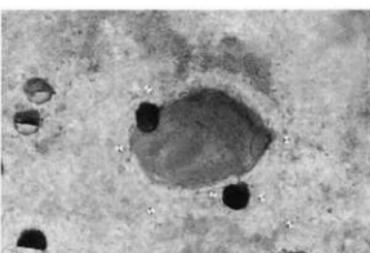
SK0136 断面（南から）



SK0136 全景（南から）



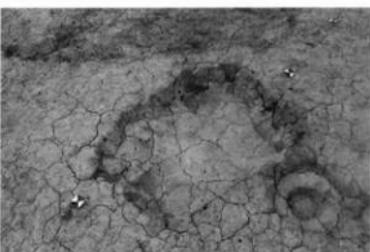
SK0137 断面（南から）



SK0137 全景（南から）



SK0142 断面（東から）

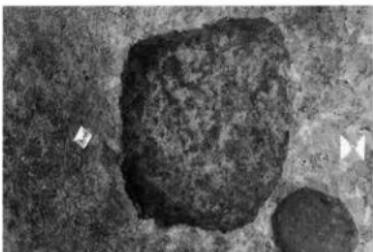


SK0142 全景（南から）

写真図版74 SK0135 ~ 0137・0142 土壙跡



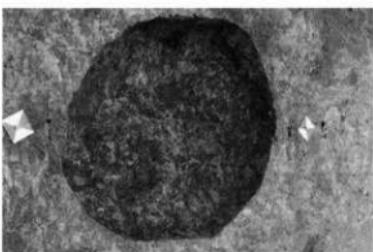
SK0147 断面（南から）



SK0147 全景（南から）



SK0149 断面（南から）



SK0149 全景（南から）



SK0154 断面（北から）



SK0154 全景（北東から）



SK0169 断面（左・南から）

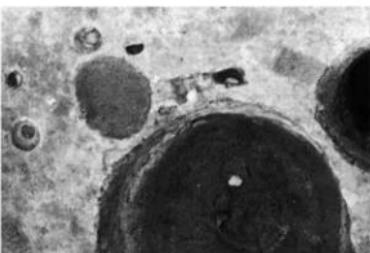


SK0169 全景（南から）

写真図版75 SK0147・0149・0154・0169 土壌跡



SK0171 断面（南から）



SK0171 全景（南から）



SK0172 断面（北から）



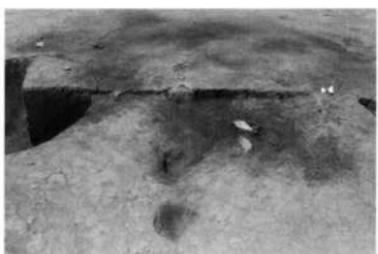
SK0172 全景（北東から）



SK0174 断面（南から）



SK0174 全景（西から）



SX0175 断面（東から）



SX0175 全景（東から）

写真図版76 SK0171・0172・0174、SX0175 土壌跡



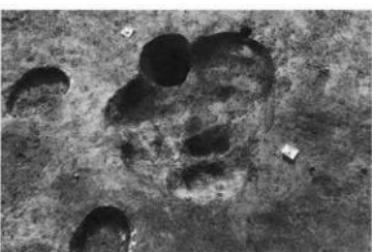
SK0176 断面（南から）



SK0176 全景（北から）



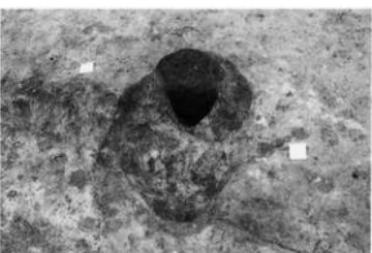
SK01103 断面（西から）



SK01103 全景（北から）



SK01135 断面（北から）



SK01135 全景（南から）



SX01136 断面（南東から）

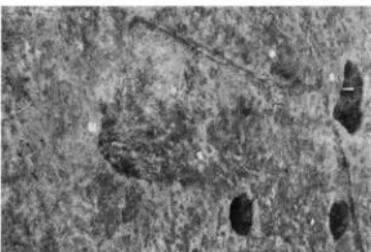


SX01136 全景（東から）

写真図版77 SK0176・01103・01135、SX01136 土壙跡



SK01137 土壌跡 断面 (南から)



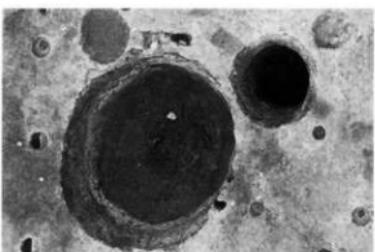
SK01137 土壌跡 全景 (南西から)



SX0153 断面 (南から)



SX0153 全景 (西から)



SX0153 全景 (南から)



SD0131 断面 A - A' (西から)



SD0131 断面 B - B' (東から)



SD0131 G 区 (北から)

写真図版78 SK01137 土壌跡、SX0153 井戸跡、SD0131 溝跡



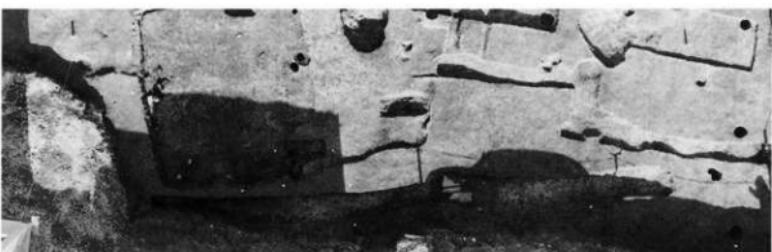
SD0131 全景 (南から)



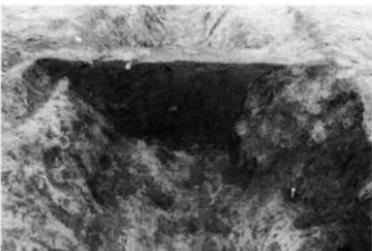
SD01115 断面 (西から) A-A'



SD01115 断面 (西から) B-B'



SD01115 全景 (南から)



SD01126 断面 (南から)



SD01126 全景 (西から)

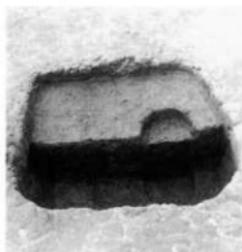
写真図版79 SD0131・01115・01126溝跡



SB0144-2 断面（南から）



BP32 断面（東から）



SB0144-1 断面（東から）



SB0144-4 断面（南から）



SB0144-3 断面（南から）



SB0144-5 断面（南から）

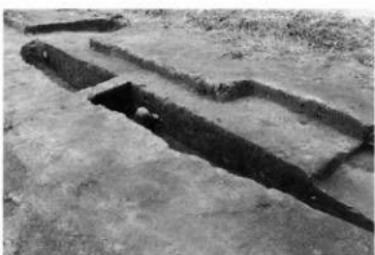


SB0144全景（東から）

写真図版80 SB0144 挖立柱建物跡



SX0132 断面 A-A' (南から)



SX0132 断面 (北東から)



SX0132 全景 (東から)



SX0177・0178 断面 (東から)



SX0177・0178 全景 (北から)



SD01120 断面 (南西から)



SD01120 全景 (南から)

写真図版81 SX0132・0177・0178、SD01120



SD0190 南断面 A-A' (南から)



SD0190 北断面 B-B' (南から)



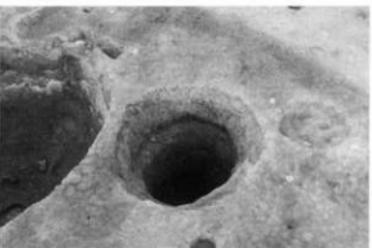
SD0190 南側全景 (北から)



SD0190 北側全景 (南から)



SK0148 断面 (南から)

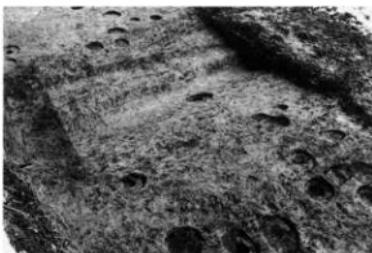


SK0148 全景 (南から)

写真図版82 SD0190 堀跡、SK0148 井戸跡



SD0146 断面（南から）



SD0146 G 区全景（北西から）



SD0146 全景（東から）



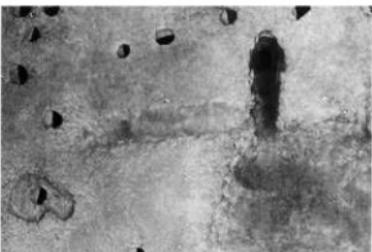
SX0130 断面（西から）



SX0130 全景（南から）



SK0156 断面（南から）

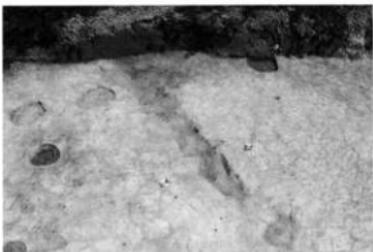


SK0156 全景（南から）

写真図版83 SD0146 溝跡、SX0130、SK0156 土壌跡



SK0157 断面（南から）



SK0157 全景（南から）



SK01134 断面（北から）



SK01134 全景（西から）



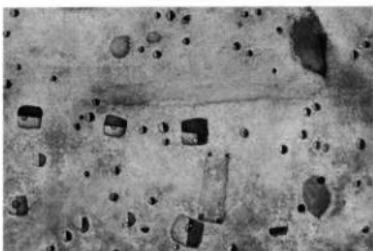
SD0139 断面（南から）



SD0139 全景（東から）



SD0141 断面（南から）

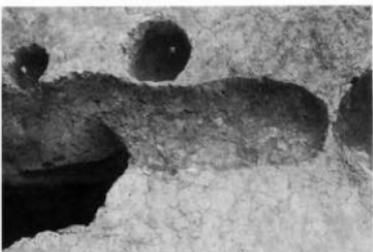


SD0141 全景（西から）

写真図版84 SK0157・01134 土壌跡、SD0139・0141 溝跡



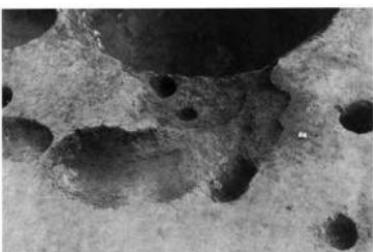
SX0179 断面（西から）



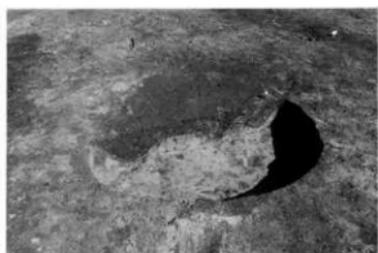
SX0179 全景（西から）



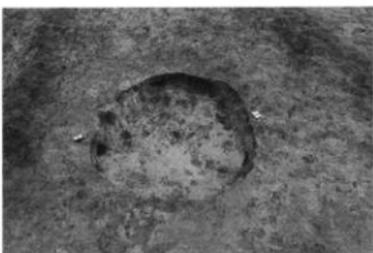
SX0180 断面（西から）



SX0180 全景（西から）



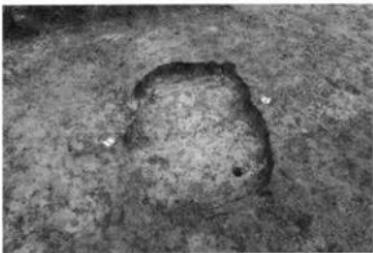
SX01117 断面（南から）



SX01117 全景（南から）



SX01118 断面（南から）

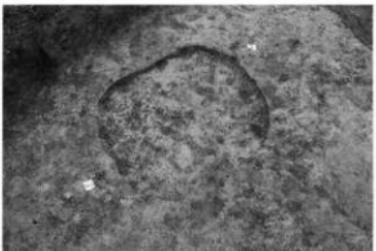


SX01118 全景（南から）

写真図版85 SX0179・0180・01117・01118



SX01119 断面（南西から）



SX01119 全景（南西から）



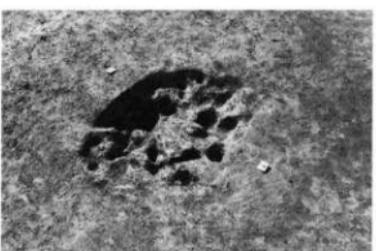
SX01122 断面（南西から）



SX01122 全景（北から）



SX01123 断面（西から）



SX01123 全景（北東から）



SX01127 断面（北から）



SX01127 全景（北東から）

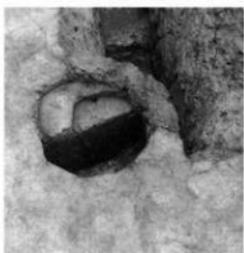
写真図版86 SX01119・01122・01123・01127



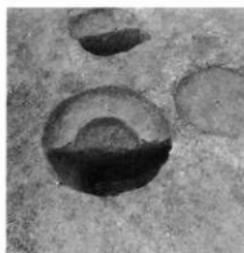
SK01132・01133 断面（西から）



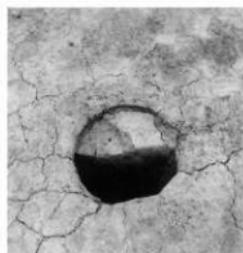
SK01132・01133 全景（西から）



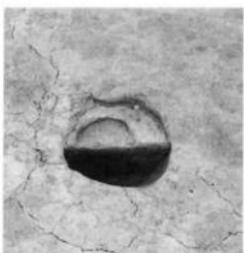
BP157



BP409



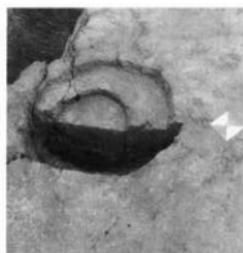
BP7



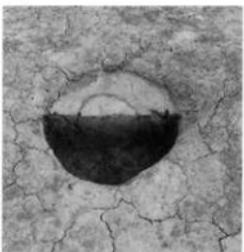
BP43



BP103



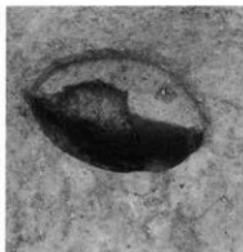
BP158



BP273



BP385



BP389

写真図版87 SK01132・01133、柱穴状ビット

T ピット



SI0140



219

220



222

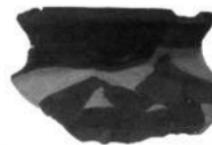


223



225

226



228

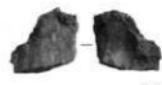


\* 232

\* 233

229

234



SI0145



240

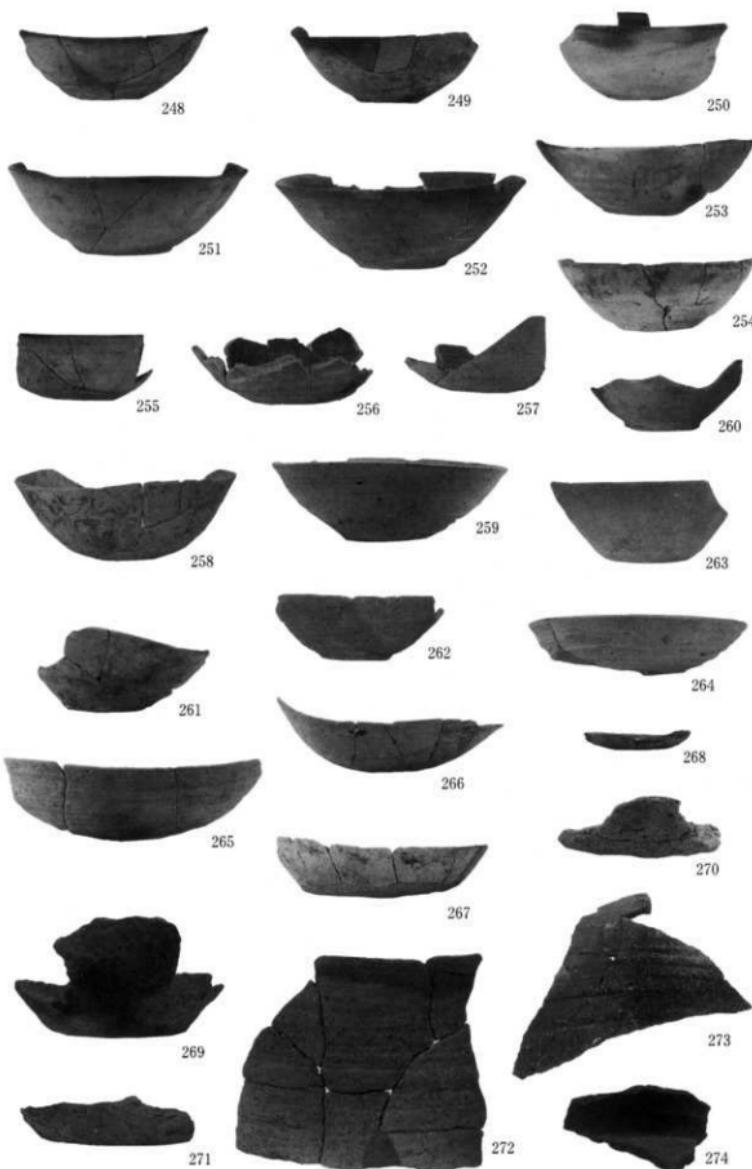


244

SI0150



写真図版88 T ピット、SI0140・0145・0150 出土遺物



写真図版89 S10150 出土遺物

SI0151



275



276



277



278



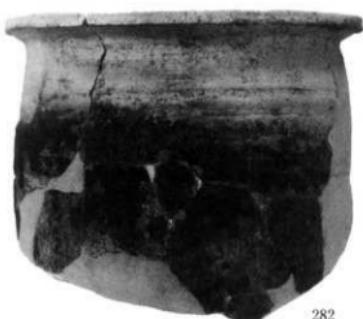
279



280



281



282

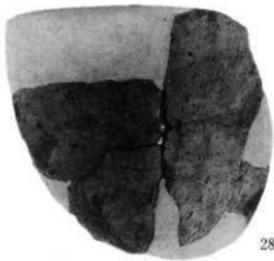
SK0172



284



285

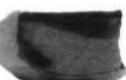


283

SI0152



286



287



288



289



290



291

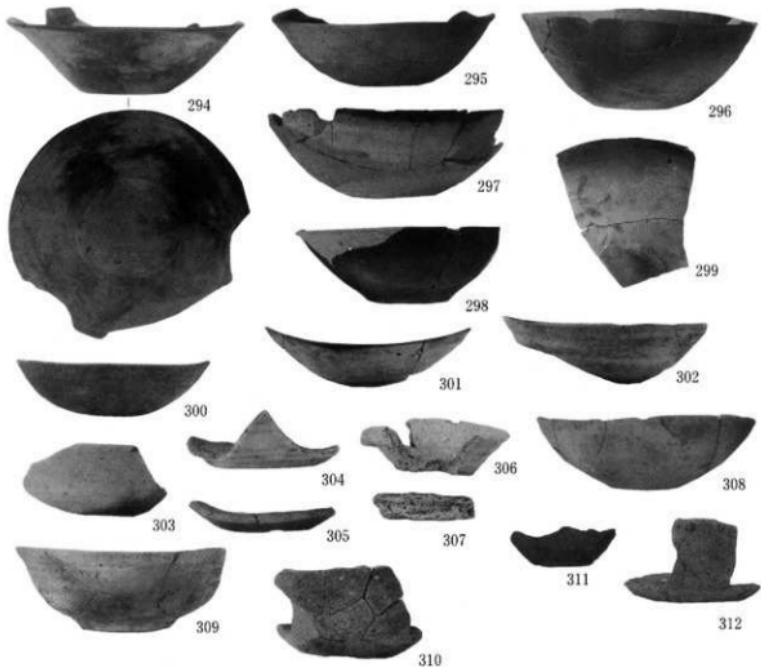


292



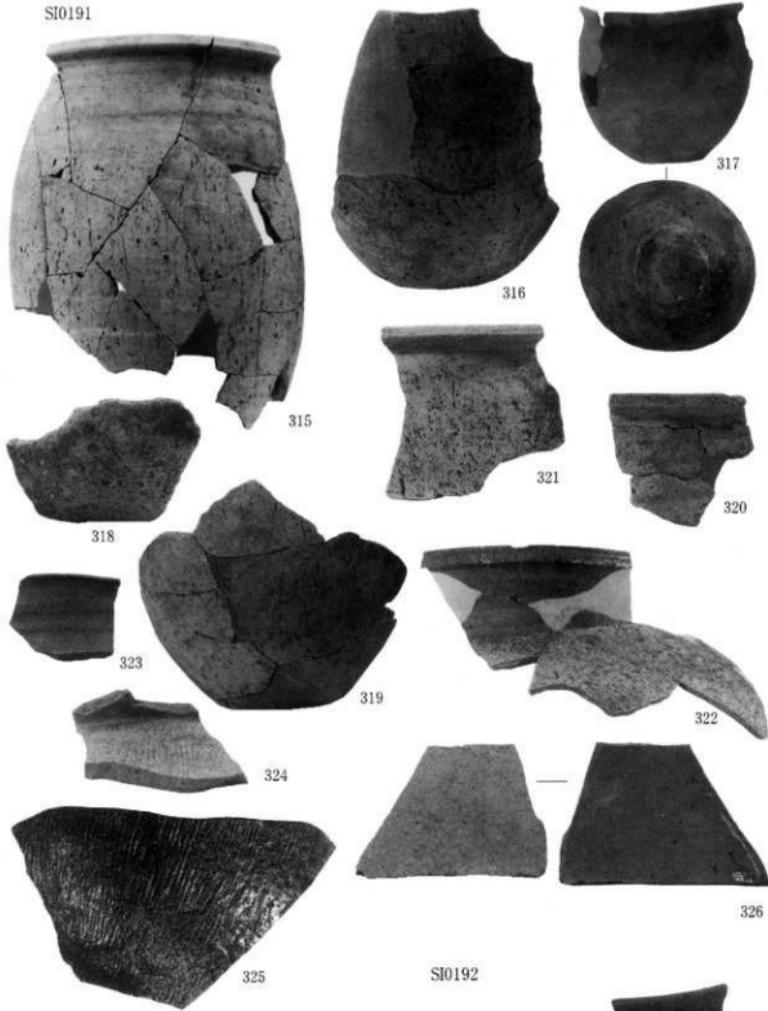
293

写真図版90 SI0151・0152、SK0172 出土遺物

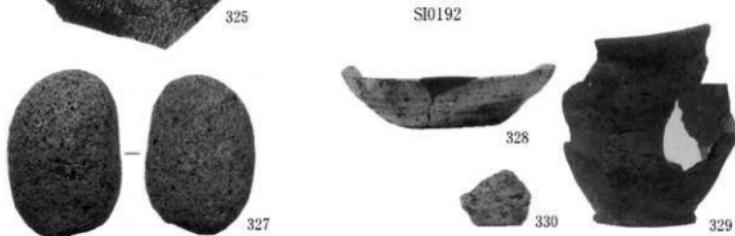


写真図版91 S10191 出土遺物

SI0191

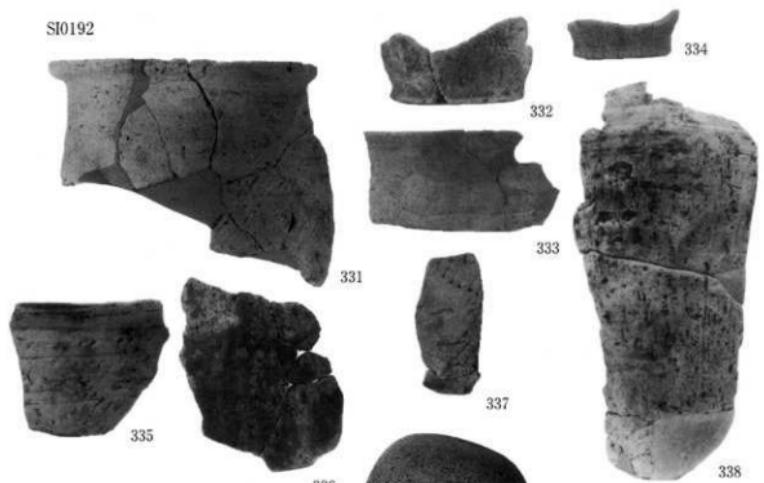


SI0192

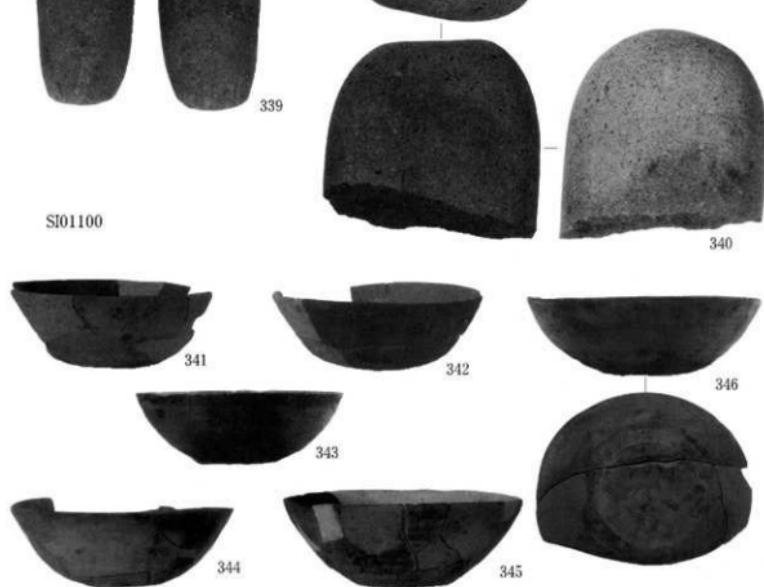


写真図版92 SI0191・0192 出土遺物

SI0192



SI01100



写真図版93 SI0192・01100 出土遺物



写真図版94 SI01100 出土遺物



写真図版95 SI01100、SK01125 出土遺物



380



381



382



383



384



385



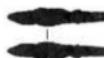
388



386



387



389



—

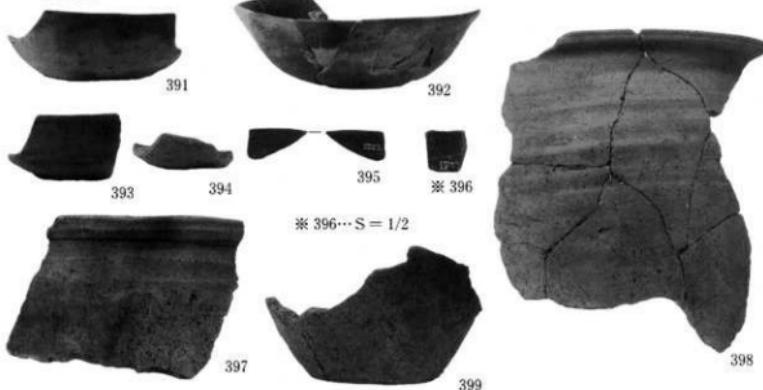
—



390

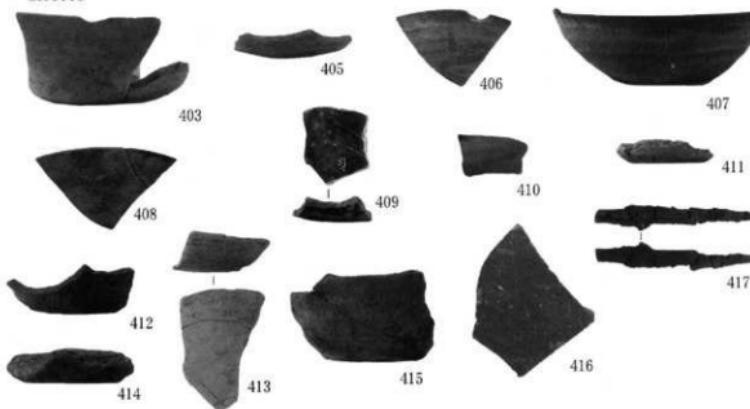
写真図版96 SI01111 出土遺物

SI01112



\* 396···S = 1/2

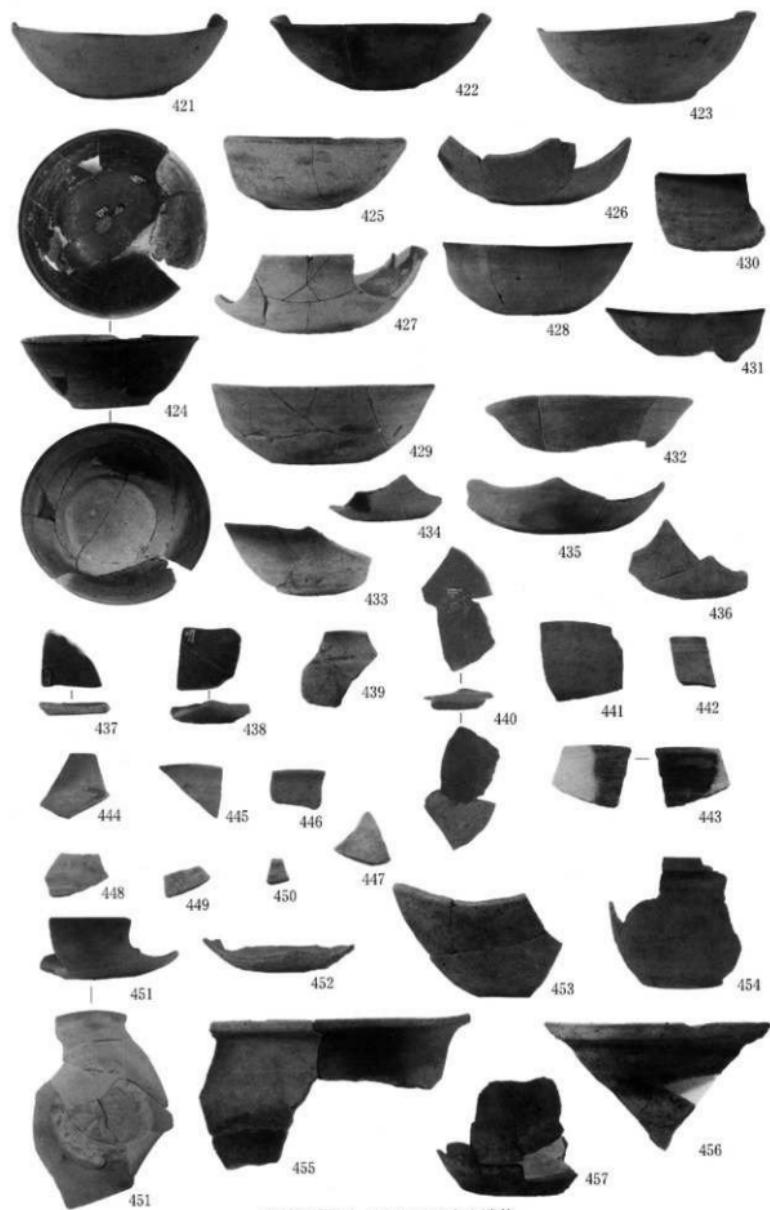
SI01113



SI01114

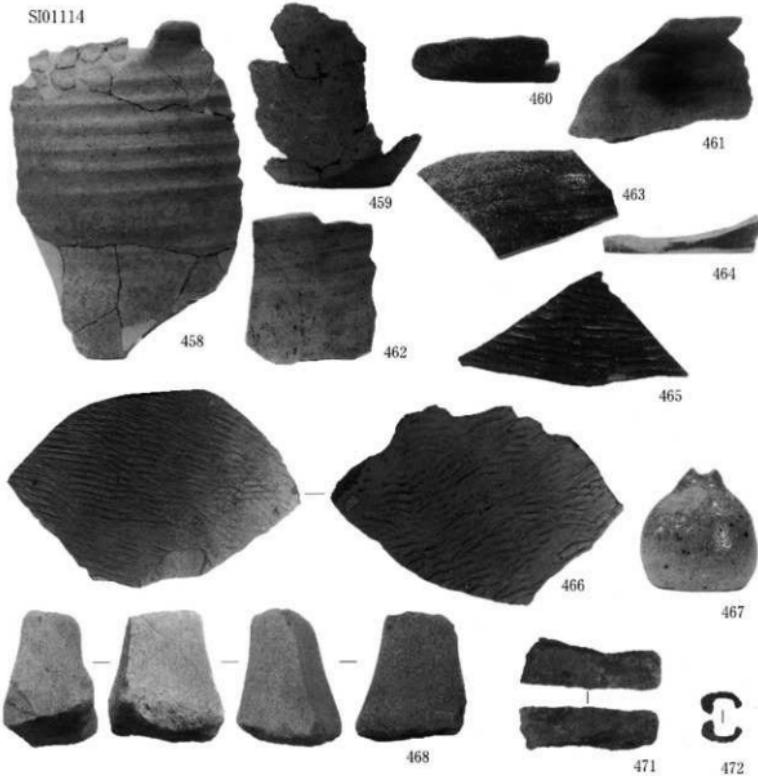


写真図版97 SI01112～01114出土遺物

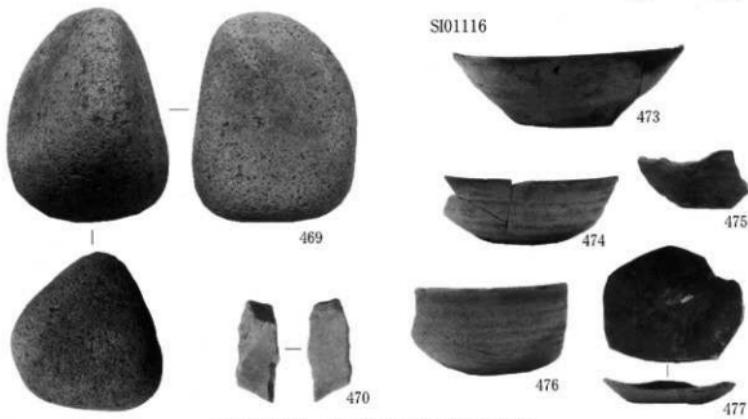


写真図版98 S101114 出土遺物

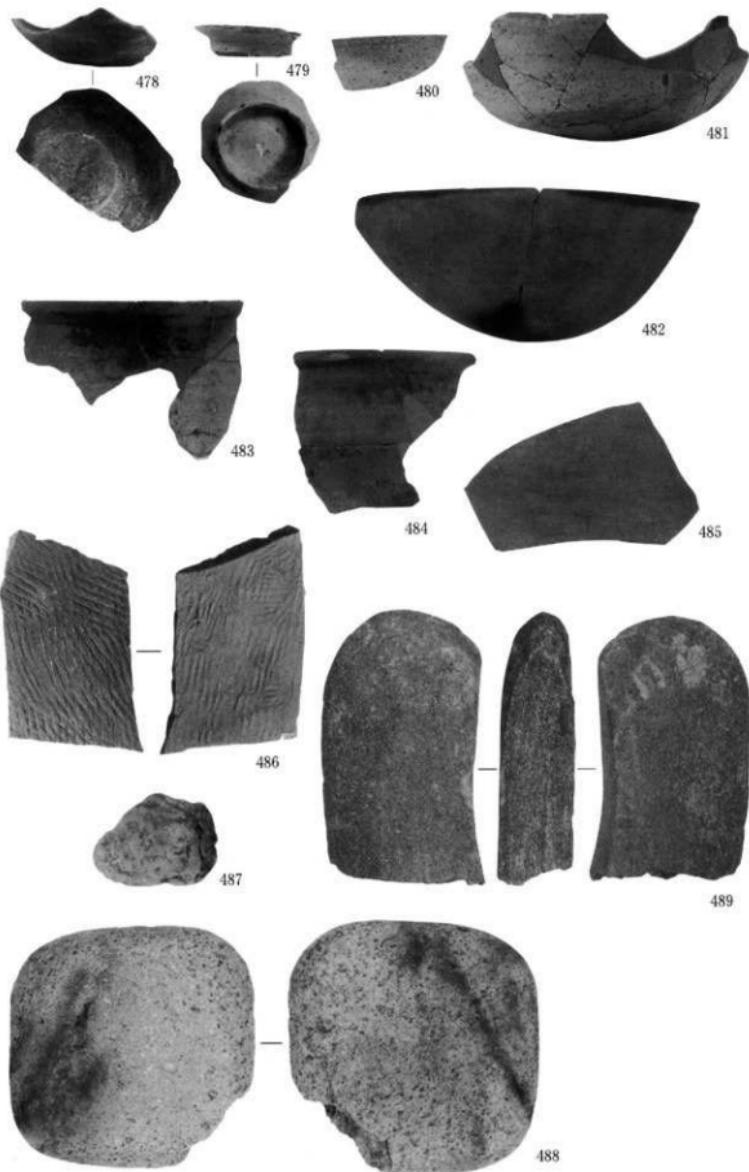
SI01114



SI01116



写真図版99 SI01114・01116 出土遺物

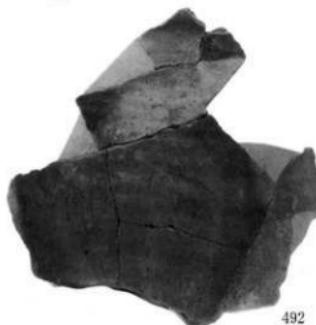


写真図版100 SI01116 出土遺物

SI01130



491



492

SI01131



493

494



495

SK0133



496



497



499



498



501



500



502



503



504



505



508



506



507



511



509



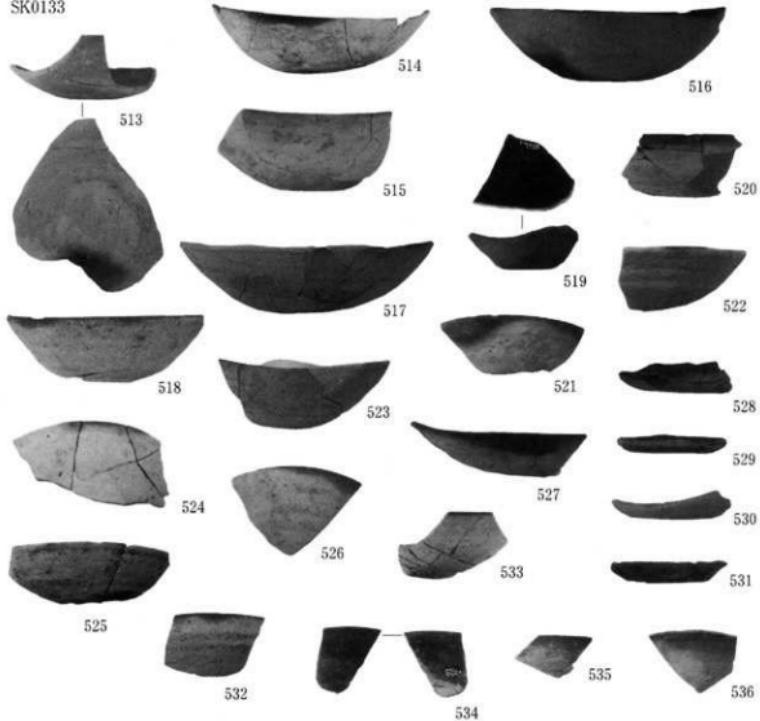
510



512

写真図版101 SI01130・01131、SK0133 出土遺物

SK0133



SK0134



SK0174



写真図版102 SK0133～0136・0169・0174出土遺物

SX0175



548



549

SX0153



550



551



552



553



554



555



556



557



558



559



560



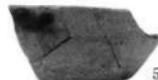
561



562



563



564



565



566



567

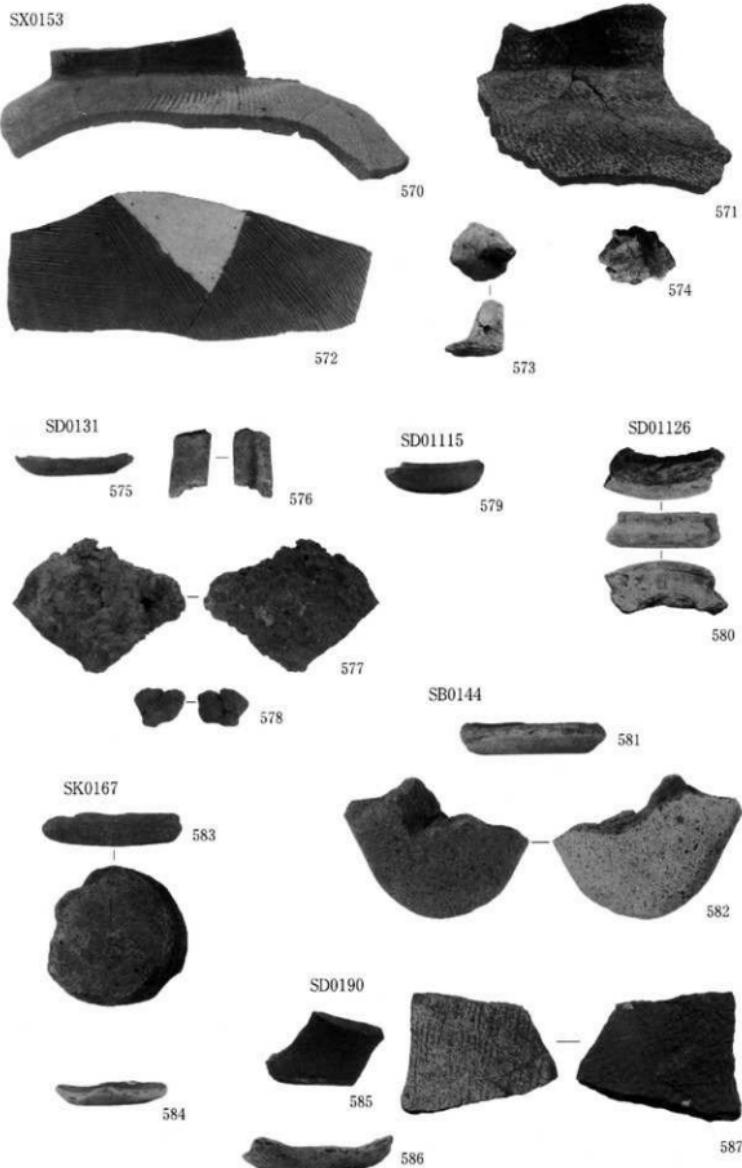


568

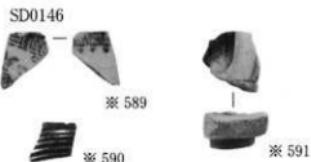


569

写真図版103 SX0175・0153 出土遺物



写真図版104 SX0153、SD0131・01115・01126、SB0144、SK0167、SD0190 出土遺物



※ 589 ~ 591… S = 1/2



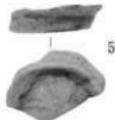
SB2-1



SB2-4



SB5-5



592

SX0130



写真図版105 SK0148、SD0146、SB2-1・2-4・2-5、SX0130 出土遺物



※ 618, 619… S = 1/2

写真図版106 SX0130、SK0133、AP・BP、遺構出土遺物

## VI 考察 一林前遺跡群をめぐる諸問題一

第20・21次発掘調査では、多くの遺構・遺物を検出した。両次調査は地点を異にするが、遺構のまとまりや出土遺物の傾向には共通する点が多い。これは従来の調査成果を踏まえても同様である。当遺跡一帯は地区別に林前I遺跡、林前II遺跡、林前南館跡と呼ばれるが、ここではこれらを総称して「林前遺跡群」と呼ぶ。以下では「林前遺跡群」をめぐるいくつかの問題について検討を加える。

### 古代

#### 1) 挖立柱建物跡について

林前遺跡群では、これまでの調査で3棟の掘立柱建物跡が発見されている。1978年度のSB63<sup>1)</sup>、1991年度のSB02<sup>2)</sup>、21次調査のSB0144である。これをまとめると次のようになる(別表1)。

別表1 林前遺跡群掘立柱建物跡一覧表

遺構名	遺跡群内位置	建物構造	桁行×梁行	建物方位
SB63	東南部	南北棟	3間×2間	N11° 30' E
SB02	北西部	東西棟	3間×?	E 4° 30' S
SB0144	西端部	東西棟	3間?×2間	N 0° 0' E

遺跡群内における建物跡の占地形態をみると、SB63は遺跡東南部の天神川旧河道対岸にある(第179図)。この地区は島状に削り残された微高地で周辺は沖積面で、調査では建物跡と溝、土壙のみから構成されることが判明している。SB02は遺跡西北部の微高地縁辺部寄りに立地し、西と北側は天神川や沖積面に臨む。21次調査のSB0144は遺跡西端縁辺部の西に天神川を臨むところに立地し、さきのSB02からは南60mの位置にある。これまでの20次以上にわたる調査事例では、遺跡群内微高地中央付近からは掘立柱建物跡は未発見であり、3例ではあるが、遺跡群内の掘立柱建物跡は遺跡の東西縁辺部に主に配置されていることが推測できる。

建物跡の規模と構造は、全体が判明しているのは桁行3間×梁行2間の南北棟建物SB63である。SB02は身舎北側柱列の桁行方向3間は確認できたが、梁行は発掘区外にあって不明である。しかし東西棟と推定できる。東西棟建物SB0144は梁行2間は確認できたが、桁行方向は西側柱が不明である。柱掘り方の状況は別表2のとおりで、埋土は互層でほとんど同じ。規模はSB63とSB0144は

別表2 掘立柱建物跡柱掘り方一覧表

遺構名	規模(一边m)	柱当り(径cm)	埋土(互層)
SB63	0.6~0.8	20~30	黄褐色土+黒褐色土
SB02	0.3~0.45	15~20	黄褐色土+黒色土
SB0144	0.55~0.8	15~20	褐色土+黒褐色土

同規模。SB02掘り方はこれらより半分ほどの規模であるが、柱当りはSB0144と同じ太さである。建物方位は0°~11°と3棟ともばらつきがみられ、集落全体の方位規制は認められない。

柱間寸法はSB63が桁行長7.205m(2.55m+2.30m+2.355m)×梁行長5.305m(2.71m+2.595m)で、すでに前章で検討したように、1尺は30.02~30.31cm前後を測る。SB0144は桁行長5.378m以上(2.593m+2.785m+α)×梁行長4.928m(2.541m+2.387m)あり、これもすでに検討し

1) 新田 賢・伊藤博幸外『林前遺跡一区画整理に伴う範囲確認調査』水沢市文化財報告書第3集(水沢市教育委員会 1979)

2) 伊藤博幸・佐久間賢・及川 洋『水沢遺跡群範囲確認調査—平成3年度発掘調査概報』水沢市文化財報告書第23集(水沢市教育委員会 1992)

たように、1尺は30.73～30.80cm前後の寸法である。S B 02は桁行総長7.29m(2.32m+2.54m+2.43m)のみが判明している東西棟建物と推定されるが、総長を24尺(8尺等間)とすると、1尺は30.37cmを測る。柱間寸法および1尺の寸法はS B 63にきわめて近いことを指摘できる。当地における平安期の柱間寸法の1尺の単位が30cm前後から31cm前後に近くになるにしたがって、時期が降ることは胆沢城跡の調査成果から確認されている<sup>3)</sup>。このことからS B 63・S B 02建物跡は、S B 0144建物跡より先行して建てられたと考えられる。時代的変遷を大枠で見ると、林前遺跡群の東西両端部に9世紀前半から中頃にS B 63・S B 02建物跡がそれぞれ建てられ、同中頃から後半にかけてS B 0144建物跡がこの地に建てられたと推測することができる。

## 2) 土器溜り遺構について

土器溜り遺構S K 0133は、21次調査で調査区西端寄りから掘立柱建物跡S B 0144と接するようにして検出された、東西2.05×南北0.75mの主軸を東西南北方向にもつ長方形の土壙跡である。現状の深さは10cm内外で、土器の出土状況からみて、削平以前はもう少し深い遺構と推定される。総数40枚以上におよぶ多量の壺を一括で埋納する遺構である。検出状況から使用済みの土器器壺を正位の状態で4～5枚ずつ重ねて置いたと推定できる。ほとんどの土器が風化を受け、器面が剥落するものが多く、埋置された土器が長時間風雨に晒された状況にあったことを示す。すなわち据え置かれた土器群は本遺構とともに埋め戻されることもなく、当初の状態を保ったまま集落内の人々の目にふれる状況にあったと解される。

土壙四隅には各々径10～15cm、深さ10cm前後の杭穴状の小柱穴が穿たれ、柱穴は底に向かって狭まることから、下端部の尖った杭状の打ちこみ式小柱と推定した。これより土壙には四隅の小柱4本からなる簡易な構造の上部施設が存在したと考えられる。ただし、それが簡易な上屋構造のものかあるいは周間にシメをめぐらすようなものであったかは判断できない。いずれにしても多量の一括土器の出土と四隅の小柱穴の存在を合わせ考えると、当遺構は集落における土器の廃棄に関わる祭祀的施設と解される。

当遺構は北壁が掘立柱建物跡S B 0144南側柱列と接している。地山に穿たれた土壙のみであれば、建物跡の軒下付近に掘削されたと解することもできるが、四隅の小柱穴の存在を考慮すると、建物跡母屋南壁と重複することになる。先後関係は遺構間に直接の重複関係がないため断定できないが、両者の同時併存は考えられない。さらに土壙の性格が、建物跡に関わる地鎮祭的遺構とするよりは、土器の廃棄に関わる祭祀遺構としての可能性が高いことも、間接的ではあるが建物跡との同時併存を否定できる要素の一つである。

ところで、林前遺跡群における土器溜り遺構については、すでに1998年度16次調査の土壙跡S K 01の報告<sup>4)</sup>がある。土壙跡S K 01は今次調査区のすぐ北側に位置し、2棟の9世紀後半の住居跡を破壊して単独に作られている。規模は東西1.65×南北1.11mの東西に長い楕円形で、深さは60cmある。壁は緩やかに外傾し、ていねいに掘削されている。遺構の内部および外周には土壙に伴う施設の存在は確認されていない。21点の土器が出土しており、内訳は土師器が壺15、高台壺2、鉢1、甕1、須恵系土器壺2である。土器は上層と下層に分かれ、遺構の埋まり方に多少の時間差があるとされる。

3) 9世紀初頭ころの、胆沢城跡の柱間寸法の1尺の単位は30cmを切り、29.83cm前後を測る例がある(伊藤博幸・新田賢外『胆沢城跡—昭和51年度発掘調査概報』水沢市教育委員会 1977年)。

4) 高橋千晶・佐々木千鶴子外『水沢遺跡群範囲確認調査—平成10年度発掘調査概報』水沢市文化財報告書第33集(水沢市教育委員会 1999)

出土状況は壺は上向き例が多いが、ていねいに埋置された様子はない。いくつかの土器に風化・磨滅が著しい例がみられる。土器の廃棄に係る形態の一つと解される。上層に須恵系土器が伴ない、時期は遺構の重複関係と須恵系土器の共伴から9世紀末～10世紀初頭と位置付けられている。

以上、林前遺跡群の十器溜り遺構に関わる事例を、土壙跡SK0133とSK01にみてきた。ともに土器の廃棄に関わる遺構ではあるが、前者は祭祀的施設を備えたかたちであるの対し、後者は可視的にこれを認識することができない。後者での祭祀形態を考える必要がある<sup>8)</sup>。

### 3) 20次調査SI0103出土の「九字」線刻土器について(第176図)

20次調査で検出した堅穴住居跡SI0103からは30点の線刻土器が出土している。これらは「九字」に関連した記号を線刻した土器群である。「九字」とは縦4×横5本の線を格子に組んだ(縛)、魔除け・呪いの記号であり、「#」などに省略されて記されることはすでに指摘されている。今次調査のSI0103出土資料の中には完全な九字を線刻した上器を含み、あわせて、共伴した線刻資料との分析から、これら九字の省略過程を推定することができる。

ここでは、SI0103から出土した九字群を残存の線の数によってA～Iに分類した。その結果、本来あるべき9本の線は、最終的には1×2本にまでなることが判明した。ただし出土した線刻土器は破片が多く、あくまで残存部における線の数に従ったもので、1×1や交差しないものなども分類対象に含めたが、九字群のひとつと考えてよいのかどうかは保留する。

九字線刻土器はすべて土師器で、高台壺1点を除いて壺、うち1点は内外面黒色処理を施す。線刻される部位は、4点が外面部、他は内面で、内面の場合多くが底部から体部にかけて、3点が口縁部に近い位置である。

A: 4×5 「九字」の完全形である。59. 内面底部から体部にかけて、一部欠損しているが約4cm×2.5cmの範囲に9本の線が格子状に刻まれている。

B: 1×5 70のみ。横5本のうち3番目の線は短く刻まれている。線刻の部位は内面部である。

C: 1×4 4点ある。そのうち3点は1×4本であるが、95だけは欠損のため4本までしか見えず、1×5本になるかもしれない。線刻は内面、体部から少々底部にかかる位置に刻まれている。

D: 1×3 2点あり、107の高台壺の内面底部に1×3の完全形が線刻される。101は外面に線刻があるが、欠損部分が多く縦1本横3本までしか残っていないので、線の数がもっと多い可能性がある。

E: 2×3 106の1点である。2×3の完全形が外面部に強く刻まれている。

F: 1×2 7点全て破片で欠損部が多く、本来はもっと多くの線が刻まれた土器であろう。しかし、どれも縦は1本であると思われる。91は内面底部に線刻があり、おそらく1×2の完形である。

G: 1×1 E・Fグループ同様欠損部が多いが、残存でこのグループに属するのは3点である。本来は1×2以上だった可能性がある。

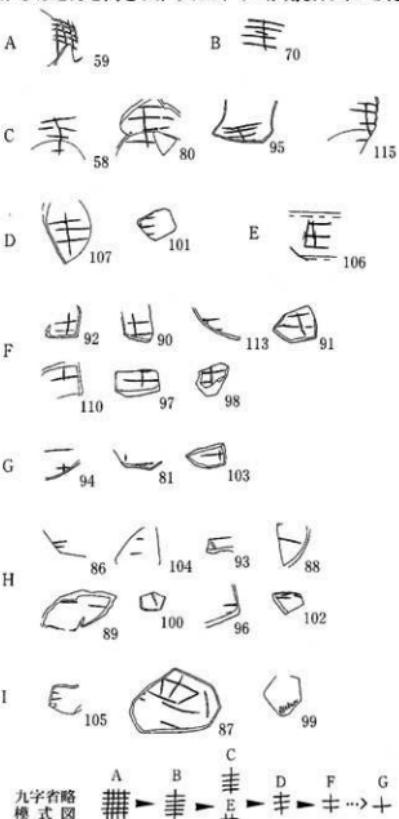
H: 交わらないもの 線は刻まれているが格子状にならないものもある。9点のうち86は3本、104は2本、それぞれ1cm前後の間隔で平行に刻まれている。88と89に至っては1本の線が刻まれているだけである。93は口縁に縦線が1本ある。96はキズも多く線刻本数は不明である。

I: その他 線刻はあるが分類A～Hに当てはまらないものが3点ある。105は外面に2本の平行線

5) 土壙跡SK01が、単なるゴミ捨て場的な施設でないことは、土壙の掘削がていねいであること、壺が上向きで出土することなどから判断できる。またしばらくの間、風雨に晒された状態にあることは、SK0133の検出状況と同様である。これらから本上壙で土器の廃棄に関わる祭祀が行われなかつたと考えることは困難である。明確な施設が検出されなくても、相当の祭祀が執行されたと推定する理由はここにある。

とその下に逆コの字のような線刻がある。これも大部分欠損しているが、逆コの字も呪符記号の可能性がある。類似資料は、21次調査SI0145堅穴住居跡出土した耳皿(237)にあり、同様の線刻がある。この耳皿は内外黒色でていねいに仕上げられ、その外面に逆コの字の記号が刻まれている。SI0103とSI0145の関連性がうかがわれる。87は内面底部に線刻があり、文字ではなく、単純に格子に刻んだようでもない。九字の省略形か、あるいは別の意味の記号なのか判断できない。線の数だけ見れば縦2本、横3本以上である。もう1点99は外面体部に細かい線が何本も引かれる資料で、九字の省略形とはまた別の記号であろうか。

以上、SI0103出土の線刻土器を分類した結果、聿(B)や圭(C)は本来の図(A)が次第に省略化、あるいは概念化されたもので、本来は同一グループであることが推測できる。ただし、省略化といっててもAからB、さらにCへというように時間的経過を追って変化したのではなく、すでにSI0103では各種同時に並行して線刻されている。それらの形式学的序列を整理したのが下の模式図である。九字の導入からほどんど間をおかずB、C…が刻まれていった事実を示すものであろう。



\*表中の括弧は数が増える可能性があるもの

	No.	線の数	線刻の部位
A	59	4×5	内面 体～底部
B	70	1×5	内面 体部
C	58	1×4	内面 体～底部
	80	1×(4)	内面 体～底部
	95	1×(4)	内面 体部
	115	(1)×4	内面 体～底部
D	107	1×3	内面 底部
	101	(1)×(3)	外面 体部
E	106	2×3	外面 体部
F	92	1×(2)	内面 口縁近く
	90	1×(2)	内面 口縁近く
	113	1×(2)	内面 口縁近く
	91	1×(2)	内面 体～底部
	110	1×(2)	内面 体部
	97	1×(2)	内面 体部
	98	(1)×(2)	内面 体部
G	94	(1)×(1)	内面 口縁近く
	81	(1)×(1)	内面 底部
	103	(1)×(1)	内面 底部
H	86	(2)	内面 底部
	104	(2)	内面 底部
	93	(1)	内面 口縁
	88	(1)	内面 底部
	89	(1)	内面 底部
	100	(1)	内面 体部
	96	?	内面 体部
	102	?	内面 体部
I	105	呪符?	外面 体部
	87	絵?	内面 体部
	99	細かいキズ	外面 体部

第176図 SI0103出土線刻資料集成図

もうひとつ、九字の省略形の典型として知られる $2 \times 2$ 「#」が1点も出土しないことの意味である。縦線2本は現存ではDの1点だけで、それも横線は3本である。大半が縦線を1本しか持たない。これは「奇数」を意識したためではなかろうか。陰陽思想において、是とされるのは「五芒星・五行」のように奇数である。その省略形で最もポピュラーなものが偶数「#」になる理由はまた別にあるらしいが、本来は奇数が落ち着く数である。林前南館跡で「#」が出土しないということは、ここに住んだ人々が「九字」のもともとの意味を正確に理解していた、つまり陰陽の信仰に直接通じていたと考えられる。ひいては胆沢城とより近い関係にあった集落の可能性をうかがわせるものである。

#### 〔参考文献〕

- 棟田彰城『まじない秘法大全集』修学社（1982）  
高島英之『古代出土文字資料の研究』東京堂出版（2000）  
山中 章『日本古代都城の研究』柏書房（2000）  
平川 南『墨書き土器の研究』吉川弘文館（2002）  
岡田保造『刻印よりみる消えた豊国社の行方』『実証の地城史』（2001）

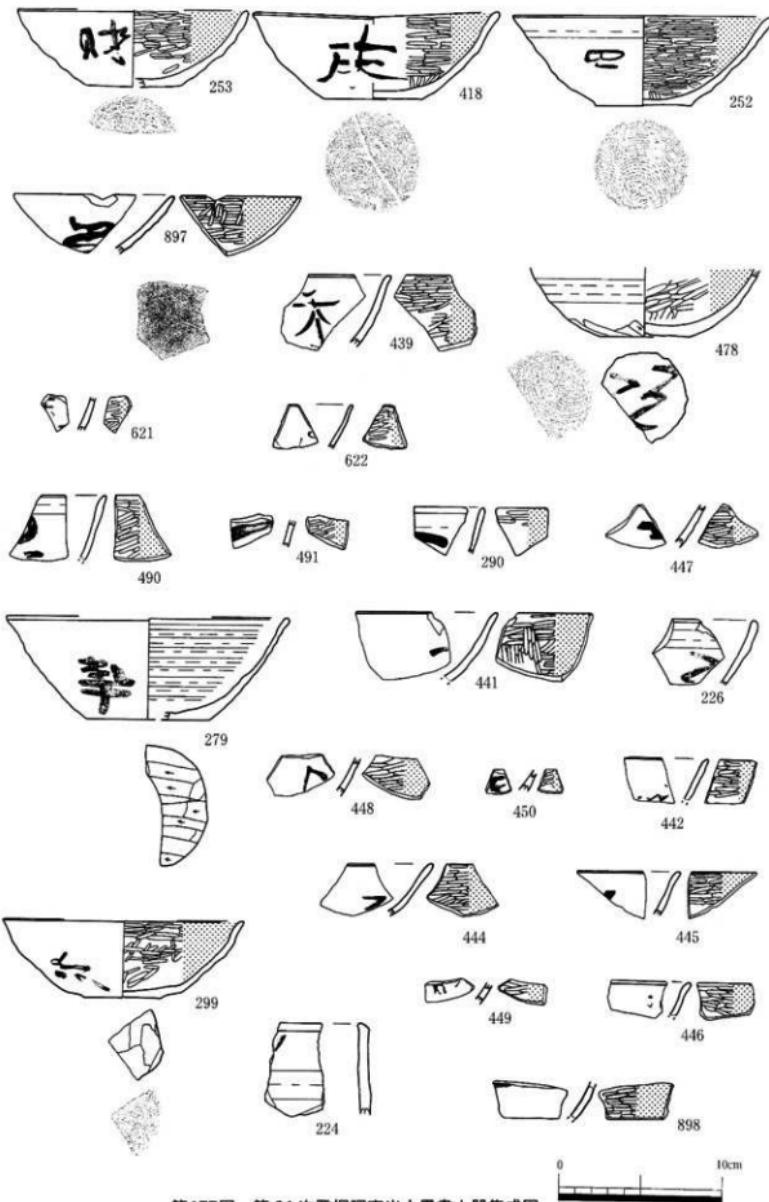
#### 4) 墨書き土器について（第177・178図）

林前遺跡群出土の墨書き土器は、1978年から現在まで10点前後ある。発掘範囲にもよるが、従来の点数は決して多いとは言えない。第21次発掘調査出土点数は字形不明の破片を含め20点余りで、単次調査による点数では多いが、遺跡の規模からみると林前遺跡群の墨書き土器保有率は総体的に低いといえる。

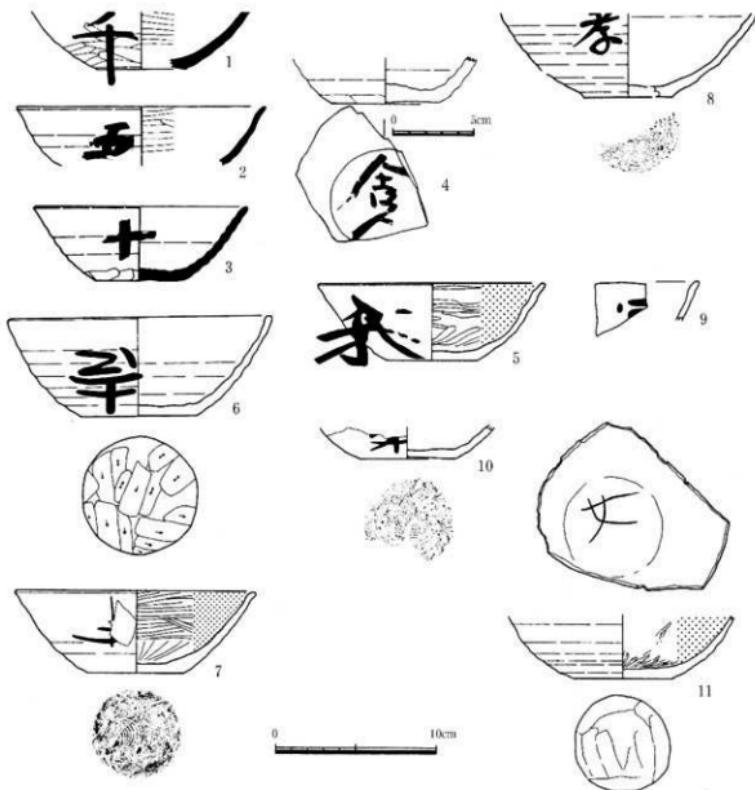
a. 第21次発掘調査出土の墨書き土器（第177図） 墨書き土器を出土した遺構のほとんどは住居跡で、S I 0140（第177図 224・226）・0150（同 252・253）・0151（同 279）・0152（同 290）・0191（同 299）・01111（同 418）・01113（同 897・898）・01114（同 439・441・442・444～450）・01116（同 478）・01130（同 490・491）の10棟がある。ほかに遺構外が2点（同 621・622）ある。うち字形が判明するのは、S I 0150の「財」（同 253）「刃」（同 252）、同 01111の「床」（同 418）、同 01113の「弓」（同 897）、同 01114の「禾」（同 439）の4棟5例ときわめて少ない。ほかにS I 0151の「圭」（同 279）類似、同 01116の「門」構え（同 478）類似例があるのみで、他はすべて字形不明か墨痕を認める程度である。墨書きされる土器は、S I 0151の「圭」類似が須恵器坏のほかは土師器坏である。墨書き部位はS I 01116の「門」構え類似が外面底部のほかは外面口縁部（体部）に正位に記される。文字はすべて1字で合わせ文字例はない。この傾向は、字形不明の土師器破片の観察でも同様である。

b. 林前遺跡群出土の墨書き土器（第178図） 1978年から始まった発掘調査で、字形のわかる墨書き土器の出土例には1978年度の住居跡S I 36の「千」（第178図1）「五」（同2）、同S I 59の「十」<sup>6)</sup>（同3）、1987年度の柱穴S A 30の「舍人」<sup>7)</sup>（同4）、1996年度の土壙跡S K 24の「我」<sup>8)</sup>（同5）、1998年度16次の住居跡S I 01の「吉」（同6）、同S I 03の「孝」<sup>9)</sup>（同8）がある。ほかにS I 01に2点（同7・10）、S I 03に1点字形不明の墨書き土器（同9）がある。上器の種類は、須恵器坏が比

- 
- 6) 新田 賢・伊藤博幸外『林前遺跡一区画整理に伴なう範囲確認調査一』水沢市文化財報告書第3集（水沢市教育委員会 1979）  
7) 佐久間賢・土沼章一『水沢遺跡群範囲確認調査—昭和62年度発掘調査概報一』水沢市文化財報告書第18集（水沢市教育委員会 1988）  
8) 高橋千晶・佐々木千鶴子『水沢遺跡群範囲確認調査—平成8年度発掘調査概報一』水沢市文化財報告書第31集（水沢市教育委員会 1997）  
9) 高橋千晶・佐々木千鶴子外『水沢遺跡群範囲確認調査—平成10年度発掘調査概報一』水沢市文化財報告書第33集（水沢市教育委員会 1999）



第177図 第21次発掘調査出土墨書土器集成図



第178図 林前遺跡群出土墨書き器集成図

較的多く、「十」「舍人」「吉」「孝」がそれで、ほかにS I 01の1点の不明墨書（同10）、S I 03の1点の不明墨書（同9）があり、第21次発掘調査出土の傾向と大きく異なる。土師器坏では、「千」「五」「我」があり、ほかにS I 01に不明墨書（同7）1点と1997年度15次のS I 03に刻書土器「女」<sup>10)</sup>（同11）がある。墨書き部位は「舍人」が須恵器坏外面底部に、S I 01の1点の不明墨書（同7）が土師器坏外面口縁部に横位状態に、「吉」が倒位に記される外は、正位状態に記される。ただし刻書土器「女」は坏見込みに刻まれる。文字は「舍人」の2字のほかはすべて1字で、合わせ文字はない。

#### c. 林前遺跡群の墨書き土器の特徴

今次調査を含めた林前遺跡群出土の墨書き土器についてまとめ

10) 高橋千晶・千田幸生外『水沢遺跡群範囲確認調査—平成9年度発掘調査概報一』水沢市文化財報告書第32集(水沢市教育委員会 1998)

ておく。墨書きされる土器には須恵器と土師器があり、器種は口常食器である壺である。これが最大の共通項でもある。第21次調査では土師器が圧倒的であるが、それ以前の調査事例では必ずしもこの傾向を示さない。これは集落内に主として須恵器壺を用いる小集団の存在を想定すべきであろう。それが時期差によるものか、あるいは集落内の小集団間の食器使用の差によるかは、さらに出土土器の詳細な分析が必要であるが、第21次調査区の出土土器の傾向が、土師器に比重があることを考慮すると後者の可能性が強い。墨書き部位は、イ) 外面底部が「門」構え類似と「舍人」の2点、ロ) 外面白縁部横位が字形不明の1点、ハ) 同倒位が「吉」1点があり、二) 他はすべて正位状態で記される。

字形では住居跡 S I 0150 と S I 01113 の「弓」が同じ行書体という共通性がある。また、S I 01111 の「床」と S I 01114 の「禾」は筆の運びが基本的に同じ字形類似のグループとすることができ、あるいは S I 0191 土師器壺(299)に記された字形不明の墨書き土器も運筆から同グループの可能性がある。この分類が認められるとすれば、1996年度の土壤跡 S K 24 の「我」と報告された墨書き土器も「禾」の類似文字とすることができます。文字は「舍人」の2字のほかはすべて1字で、合わせ文字は見られないという特徴があり、この点では他の一般集落とも若干様相を異なる。

### 5) 出土土器について

出土土器の種類には、上師器、須恵器、須恵系上器、縁釉陶器、灰釉陶器などがあり、土師器が80%以上を占める。器種は土師器では、壺・高台壺・高台耳皿・鉢・片口土器・甕・小甕があり、須恵器は量は少ないが、壺・長頸瓶・大甕・小甕・短頸壺がある。須恵系上器は壺、縁釉陶器は椀皿類、灰釉陶器は小瓶がある。ここでは土器の製作技術を中心まとめる。

土師器壺・高台壺は内面黒色処理するA類土器<sup>11)</sup>が主体であるが、非内黒の壺(215・562・452)もわずかにみられる。また壺・高台耳皿には内外面黒色処理するB類土器も定量的に存在する。

壺の製作技法は、ロクロ成形で、底部糸切り無調整とヘラケズリ調整の2種がある。ケズリ調整はさらに不定方向ケズリと回転ケズリがあり、前者が主体的である。ケズリ調整は基本的に底部の一部に施されるが、底部全面を不定方向ケズリ(382・452)や回転ケズリ(421)する例もある。全面ケズリ調整では体部下端まで不定方向ケズリが及ぶもの(543・544・542)と回転ケズリが施されるもの(379)がある。また、きわめて類例は少ないが、ヘラ切りでケズリ調整を行う壺A類上器(358)がある。さらに底部全面を不定方向ケズリで丸底風に仕上げる壺A類土器(405)、壺B類土器(496)もある。

壺の内面ミガキ手法は、口縁部横位、見込み放射状が基本であるが、口縁部連弧状ミガキ(421・434・426)、口縁部斜位ミガキ(428・493)も一定量存在する。見込みミガキは密になされるが、ミガキが見込みに及ばない例(501・497・511)や見込みに不定方向に粗いミガキを暗的に描くもの、見込みに横ミガキで五角形を描くもの(623)なども客体的にある。壺の手捏土器(537)は、器体が歪む底部静止糸切りで、口縁部内面は横ミガキがわずかに施されるのみで、見込みには及ばない。

壺の形式は口径14~15cm前後が多いが、16~18cm前後の椀形式(496・524・554)もある。さらに椀形式では、口径17.8~18.1cmの大椀(596・598)と口径19.0cmの大椀ないし鉢(403)形式となるものがある。ほかに内面を横位ミガキする椀形式の壺(494)で、口縁部を玉縁状に肥厚させるものがある。

11) 土師器の器面を黒色処理する「黒色土師器」のうち、内面のみのものを黒色土師器A類、内外両面処理するものをB類と呼ぶ。前者は通称内黒土器あるいは内黒土師器と呼ばれる。伊藤博幸「陸奥国における黒色土師器—その展開と終焉—」『東北上器研究』第3号(1990)

坏B類土器は、内外面横位ミガキ（395）を基本とし、底部までミガキが及ぶ例（440）もあるが、外面ミガキが口縁端部のみで全面に及ばないもの（534）、外面ミガキをしないものもある。坏B類土器は一部のA類土器とともに、基本的に施釉陶器や仏器の模倣であり<sup>12)</sup>、灰釉陶器小椀を模したもの（495・424）もある。これらは外面を緻密な横位ミガキで仕上げている。

高台坏は内面緻密なミガキで、身の深い椀形式と坏身の浅い皿形式とがある。高台内はほとんどが菊花状文に調整（512・561）されるが、ロクロナデ調整（479）もある。

高台耳皿（237・238）は緻密な胎土で、高台内もていねいなミガキが施されるB類土器が主体であるが、内面のみミガキ、黒色処理し、外面無処理のA類土器（540）耳皿がある。

鉢は内面黑色処理するA類土器（453・430）が主体であるが、内外面黑色処理するB類土器（481）もわずかに存在する。鉢の製作技法は、ロクロ成形で、底部糸切り無調整（581）とヘラケズリ調整の2種がある。ケズリ調整はさらに不定方向ケズリと回転ケズリがある。ケズリ調整では、外面口縁部下半から底部までヘラケズリが及ぶもの（453）がある。内面ミガキ手法は、口縁部横位が基本であるが、ハケ目状小口調整（453）もある。

鉢の形式は2種ある。ロクロ成形により口縁部を受け口状に屈曲させる形式と、胴部上半が球胴を呈し、口径に対して器高が比較的低い、口縁部が短く「く」の字に外反する形式（370・369）で、前者が一般的である。後者の類例は陸奥北半部ではきわめて少ない形式である。前者には口径27.6cmの大鉢A類土器（482）がある。

鉢B類土器は、内外面横位ミガキ（481）を基本とする。

片口土器（306）は小皿形式で非内黒、内面はコテ作り手法で平滑に仕上げる。焼成は須恵系土器に似る。

壺は大小2種があり、成形手法はロクロ成形と非ロクロ成形がある。ロクロ成形壺は大甕（566）、小甕（565）があり、調整手法は外面斜位の平行叩き後、縦ないし斜位方向ケズリを原則とするが、内面はロクロナデ、指ナデ、ロクロ搔き目、ハケ目調整がある。小甕は回転糸切り無調整（454）、静止糸切り無調整（565）があるが、胴部下端はケズリ調整される。底部糸切り無調整で、外面胴部縦ケズリで面取りを行い、内面はハケ目状具で搔き取り調整するもの（547）がある。また、ロクロ壺で底部に砂粒が付着した「砂底土器<sup>13)</sup>」（459）が1点ある。

非ロクロ壺の大半は、胴部に粘土紐作り痕をとどめ、製作手法は底部粘土板無調整と、底部粘土板を不定方向ケズリ（399・414）調整する2種がある。いずれも外面胴部下半部は縦方向ケズリである。口縁部が横ナデ調整で、短く外反し、内面胴部は横位の小口搔き取りや細かいハケ目、底面は粘土板ナデ調整がおこなわれるもの（538・548）がある。非ロクロ壺で、内面はミガキ後ていねいな黒色処理される例（307）もある。

須恵器は坏・長頸瓶（401・464）・大甕（570・465・486）・小甕・短頸壺（375）がある。

坏の製作技法は、底部糸切り無調整とヘラケズリ調整の2種があり、前者が主体的である。ケズリ調整はさらに不定方向ケズリと回転ケズリがある。

短頸の壺（375）や甕（227）は量的にはきわめて少ない。長頸瓶は底部に扁平な輪高台の付く形式で、高台内がケズリ調整されるもの（230・464）と、外面胴部下半回転ケズリのもの（401）がある。

12) 伊藤博幸「黒色土器の供獻——東北地方における平安時代土器生産の一断面——」『古代文化』第36巻第4号（1984）

13) 櫻田 隆「『砂底』土器考」『翔古論叢—久保哲三先生追憶論文集—』（1993）

利部 修「砂底須恵器の一考察」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第10号（1995）

甕は大小2種がある。胴部の調整手法の差で数種に分かれる。内外面平行叩き(465)、内面同心円文を残す(466)、外面平行叩きを交差させ、内面は平行文に連続文叩き(468)、外面平行叩き、内面ナデによる磨り消し(570・569)、外面平行叩き、内面粗めの平行条痕を当て其痕跡として残すものなどがある。中型甕では、内面をロクロ括き目調整する例(322)がある。

須恵系土器は坏のみで、糸切り無調整である。ほとんどの坏は内面コテ当て作りで平滑に仕上げられている。口径16.0cmの楕形式(611)がある。皿・高台坏・高台皿などは出土していない。

施釉陶器には綠釉陶器と灰釉陶器がある。綠釉陶器は楕(233)・皿(232)類で、灰釉陶器は小瓶(467)がある。いずれもK-90号窯式の新しい段階のものである。

出土上器の様相をみると、上師器は調整にケズリが伴ない、またミガキ手法にも横位ミガキがみられるなど、全体的に古相をとどめるが、須恵器坏では古相をとどめるものはない。須恵系土器は器種が坏のみで、法量的にもまだ大きく、初現期を大きく降るものではなく、須恵系上器I期<sup>14)</sup>段階に相当する。さらに施釉陶器の年代が9世紀後半の一点を示している。これらより胆沢城の土器の編年観からみて、林前遺跡21次調査区の集落跡の年代は9世紀第3四半期から第4四半期を経て、10世紀はじめ頃までの存続年代が考えられる。

#### 6) 古代における林前南館跡の性格(第179図)

林前南館跡第21次調査で検出された古代の遺構には、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土壙跡、溝跡などがある。また住居跡S I 0191床面中央から径30cm、深さ20cmの土壙底面に、径10cm、深さ20cmの小孔を穿ったロクロビットが検出されている。小孔はロクロ中心軸(芯棒)の据え孔である。住居床面北東部の白色粘土塊の存在を考慮すると、本住居は屋内の土器製作の場であったことを指摘できる。上器の製作量や供給先などについては不明だが、一般的に土器作りの遺跡に土器埋納遺構あるいは土器祭祀遺構が伴うことは、つとに指摘されており<sup>15)</sup>、本遺跡もこの事例に当てはまると思われる。すなわち住居跡S I 0191土器製作とSK 0133土器溜り遺構の組み合わせである。この考え方を敷衍すれば、林前南館跡では土器祭祀遺構に関わる二つのパターンが認められることになる。一つが上述の上器製作との関わりで理解できるもの、他の一つが1998年度16次調査の上壙跡SK 01のあり方である。今次調査区のすぐ北側に位置する土壙跡SK 01土器溜り遺構は、SK 0133土器溜り遺構と比較して施設的にはていねいに土壙を掘削するだけの簡易なものである。時期的にも後出的な土壙跡SK 01土器溜り遺構は、むしろ集落における生活上の土器廃棄に関わる施設と解したい。つまりともに集落内で執行される祭祀に変わりはないが、土器製作に関わる土器廃棄形態と、日常生活に関わる土器廃棄形態があったことをここでは想定しておく。

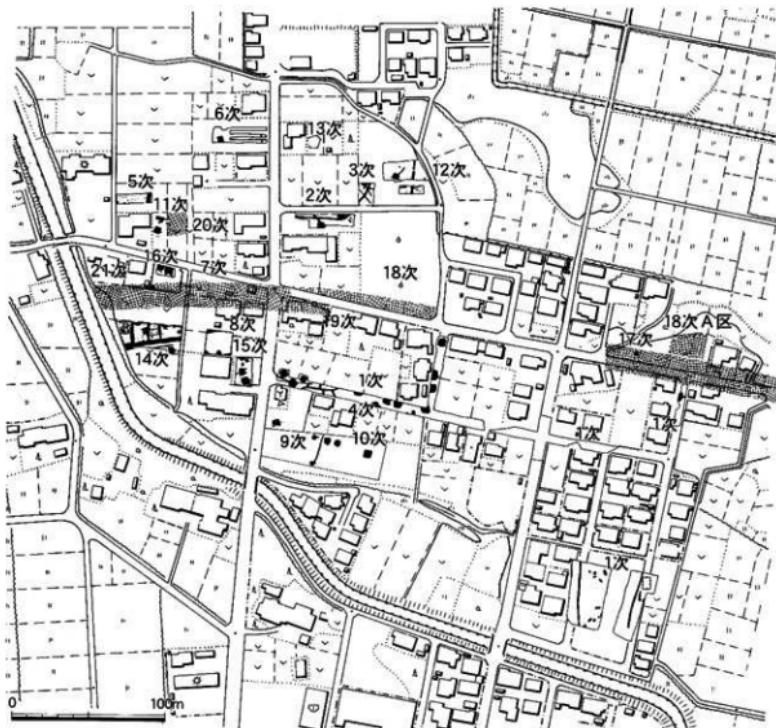
第20次調査で出土した「九字」に関する一括資料は、すでに分析したように、九字の究極の省略形「#」に型式変化する過程を窺うに十分な情報である。9世紀に大量に入ってくる律令的祭祀が胆沢城周辺でもほとんど同時に行われていたことを示すもので、土器溜り遺構のあり方とともに林前南館跡を特徴付ける一つでもある。

墨書き土器が出現するのも、9世紀陸奥国北半部集落の特徴の一つである。林前遺跡では、集落跡東半部地区出土の墨書き土器は須恵器に記される例が多いが、第21次調査の西半部地区では土師器が圧倒的に多く、類例も増加する。須恵器の供給の問題や土師器使用量の増加など、検討すべき課題は多い

14) 伊藤博幸「後半期の集落」『岩手考古学』第10号(1998)

15) 草間俊一編著『岩手県江刺市瀬谷子遺跡第3次緊急調査報告』(江刺市教育委員会 1971)

伊藤博幸「岩手県の古代土器生産について」『岩手史学研究』第61号(1976)



第179図 林前遺跡群検出遺構配置図

が、時期が降るにしたがって墨書き土器が増える傾向は事実である。ただし、墨書き土器を個々にみた場合、字形を共有するのは住居跡 S I 0150 と S I 01113 の「弓」、S I 01111 の「床」と S I 01114 の「禾」、SK 24 の「禾（我）」の類似文字のみで、総量としては墨書き土器が少ない感は否めない。「舍人」については、律令制下の胆沢城に関わって「トネリ」と呼ばれる雜事等に従事した階層の存在が想定できる。

林前南館跡を遺構からみると、住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、集落の内外を区画する溝跡から構成されている。ことに掘立柱建物跡、井戸跡は平安時代にならないと出現しない構成要素で、これもすでに指摘されているように、集落形成に胆沢城が関与したものと理解できる<sup>16)</sup>。すなわち住居を除くこれらは胆沢城跡の遺構を構成する要素でもある<sup>17)</sup>。胆沢城周辺の村落成立を考える際、律令権力

16) 新田 賢・伊藤博幸外『林前遺跡一区画整理に伴なう範囲確認調査』水沢市文化財報告書第3集（水沢市教育委員会 1979）

17) 伊藤博幸「胆沢城と古代村落—自然村落と計画村落—」『日本史研究』第215号（1980）

17) 伊藤博幸・及川淳『水沢遺跡群範囲確認調査一平成3年度発掘調査概報』水沢市文化財報告書第23集（水沢市教

の関与は否定できず、これらを「計画村落」と呼んでいる<sup>10</sup>。第21次調査区での集落跡の年代は9世紀第3四半期から10世紀はじめ頃までの存続期間が考えられるが、林前遺跡群の成立は、南東部寄りから東半部で9世紀前半で形成が始まり、集落を分散的に拡大していく、同じ頃から後半でかけて西半部を主として占地はじめる状況が窺える。形成当初の集落は、カマド煙道部の短い竪穴やベッド状造構を有する竪穴など非東北的な方を示し、坂東方面からの移住を示唆する。9世紀後半になると、21次調査区でみたようにその方には在地型に変化しており、移民集団の後裔が在地に吸収されていることを指摘できる。ただし集落構成の諸要素は一貫して集落形成当初の形態を維承しており、胆沢城権力の関与が一時的でないことが窺える。

これまで胆沢城が周辺集落成立に際して主導したことを窺わせる「計画村落」には、二つのパターンがあることが指摘されている<sup>11</sup>。一つは土器組成が須恵器主体で、遺構が掘立柱建物跡+井戸+区画溝（およびそのバリエーション）から構成される典型的な事例とし、立地が胆沢城から4km圏内にある遺跡群である。他の一つは胆沢城からの距離が5.5km以遠の遺跡群で、土師器に対し、須恵器が相対的に少ないグループである。この差は律令的土器様式の規制の差にあると考えられている。ただしこれをもって胆沢城との関係が稀薄とみるのではなく、胆沢城からの支配関係はむしろ一方的関係にあったことが指摘されている。林前遺跡群は「計画村落」の条件を十分に備えながらも、後者の典型的な事例として位置付けられることを示すものである<sup>12</sup>。

林前遺跡群は、坂東方面からの移住集団を内包して、9世紀前半で「計画村落」として成立した集落跡である。その際、移住集団は本貫地の生活様式を住居やカマド構造に残し、また在地信仰をそのまま持ち込んで集落での律令的祭祀をも執行した。九字、器に墨書きする慣行、土器廃棄に係る祭祀などがそれである。その上に、胆沢城権力が介在し、2間×3間構造の掘立柱建物を集落内の数ヶ所に建立させたと考えられる。県内における集落内の掘立柱建物跡の基本構造が、わずかな例外を除いておしなべて2間×3間であることは、集落に建てる掘立柱建物の規模や構造について、ひとつの基準が存在したことを窺わせる<sup>13</sup>。

## 中世

### 1) 中世竪穴遺構

林前遺跡群からは、中世竪穴遺構が1993年度の第10次調査<sup>14</sup>で1棟、本年度第20次調査で2棟の計3棟発見されている。いずれも中世方形居館を囲繞する21次調査番SD 0190(20次調査SD 0104、14次調査SD 06<sup>15</sup>)の外側にある。第10次調査の竪穴遺構SX 21は、堀の南東約110mの平坦地に位

育委員会 1992)

18) 前出註2)、3) 文献。

19) 伊藤博幸「律令制村落の基礎構造—胆沢城周辺の平安期村落—」『岩手史学研究』第80号(1997)。なおここでは、村落の構成要素に①住居、②掘立柱建物、③井戸、④区画溝のほかに、⑤広場を加えている。

20) 胆沢城の南500mに立地する伯済寺遺跡は平安前期の竪穴住居+掘立柱建物跡+区画溝から構成される集落跡だが、ここでは建物の方位が掘立柱建物跡はもとより、竪穴住居まで胆沢城の建物方位である真北を向くように配置されている。胆沢城の規制が集落構成におよぶ典型事例である。千田幸生・伊藤みどり「伯済寺遺跡」『平成14年度水沢市内遺跡発掘調査報告会資料』(水沢市埋蔵文化財調査センター 2003)

21) 胆沢城による規制が、より強力だったと推定される伯済寺遺跡の掘立柱建物跡も基本構造は2間×3間で、柱筋を備えて建つ。前出註20) 文献。

22) 伊藤博幸・池田明朗外「水沢遺跡群範囲確認調査—平成5年度発掘調査概報—」水沢市文化財報告書第28集(水沢市教育委員会 1994)

置し、20次調査の竪穴造構S I 0102、S I 0105は北辺壙跡SD 0104の北7~8mのところにある。

竪穴造構S X 21は、南北方向に延びる古代の溝跡SD 17を破壊して作られる一辺24mの方形竪穴で、各辺は発掘基準線に対し北でやや東へ偏する。東壁にスロープ状の張り出し施設を有する。埋土は最下層の厚さ数cmの黒褐色土層を除くと、黒褐色土と黄褐色土ブロックの混合土単層で、これは張り出し施設埋土にも及ぶ。竪穴本体の壁は垂直ぎみにていねいに掘削され、深さ約30cmある。床面は平坦で、カマドや焼土面は検出されていない。四壁内側に沿って大小の柱穴が掘られる。径20~25cm、深さ20~30cmの大きい柱穴は主柱穴で、四隅と東西壁中ほどに各1本の計6本からなる。小さい柱穴は径5~9cmの杭に近い副柱で、深さも10~15cmと主柱穴に較べて浅い。主柱穴の柱配置と東壁のスロープ状張り出し施設から、東西1間×南北2間の東を正面とする竪穴構造と解される。

S I 0102は東西2.8×南北3.0m、深さ10cmの方形竪穴で、西壁に張り出し施設を有する。埋土は張り出し施設を含めて、黒褐色土と黄褐色土ブロックの混合土単層である。床面は平坦で、カマドや焼土面は検出されていない。竪穴の柱穴は壁の四隅に径25~30cmの主柱穴を配し、主柱穴間の各辺には径20~25cm前後の副柱穴を2個配する。基本的に主柱穴は壁の内側に接して、副柱穴は壁際を半分ほど掘り込んで立てられる。基本的には西を正面とする1間×1間の竪穴構造であろう。

S I 0105は規模不詳の方形竪穴で、東壁にスロープ状の張り出し施設を有する。埋土は張り出し施設を含めて、黒褐色土と黄褐色土ブロックの混合土単層である。竪穴の壁はほぼ垂直に掘られ、深さ25cmある。北東隅壁内側には径約30cmの主柱穴が立つ。張り出し施設は3段の階段状スロープをつくる。規模不詳の東を正面とする竪穴である。

3棟の最大の共通項は、埋土にある。黒褐色土と黄褐色土ブロックの混合土単層で、いわゆる中世竪穴特有の埋土といえる。従来これらは、「意識的に埋め戻された状況、人為的に埋められた状況」として報告されている例が多数であった。これは古代の竪穴住居の埋土との比較から導き出された一つの見解であり、竪穴埋土は自然に堆積するという暗黙の前提に立つ。しかし、埋土の観察結果からみれば、人為的に埋め戻された状況を窺うことはむしろ困難である。それは黒褐色土と黄褐色土ブロックの混合土がほとんど均質的な状況で埋まっていることにある。人為的な所産であるなら、ある一定方向からとか、埋土ブロックの偏りとか、埋め戻しに関わってその所作を示す痕跡が認められるはずであり、報告者はその根拠を示す必要がある。また均質に混合土を埋め戻す必然性の説明が求められる。このように考えると、むしろ均質的な埋没に人為性を認めることが問題であることになろう。

S I 0102の埋土は、断面観察の結果、南壁際の副柱穴の根元寄りがまだ残っている段階に埋没している。これは人為的埋め戻しをとる場合、柱材を完全に抜き取らないままの作業ということになり、このような作業を想定することは難かしい。

福島県の表郷村三森遺跡<sup>23)</sup>からは、中世方形居館の西外側から東西5m×南北3.6m、深さ約1.5mのほぼ垂直に壁を掘削した竪穴造構が発見されている。短辺の東壁にスロープ状の張り出し施設を有する。床面には四隅の対角線上に4本の柱が配置されている。ここでの埋土は、深さ1.5mにわたってほぼ均質に黒褐色土と黄褐色土ブロックの混合土が堆積していた。このような深さの竪穴を人為的に、しかも黒褐色土と黄褐色土ブロックの混合土で均質に埋め戻すことは至難の技であろう。

以上、人為説を否定した場合、埋土が共通する中世竪穴で、自然にかつ均質に埋土が埋没する過程を考える必要がある。それは順次というよりいっきに埋没が進行する場合を想定すべきであろう。つ

23) 高橋千晶・佐々木千鶴子『水沢遺跡群範囲確認調査―平成8年度発掘調査概報―』水沢市文化財報告書第31集

(水沢市教育委員会 1997)

24) 戸田有二編『越後山Ⅱ』(表郷村教育委員会 1997)

まりそれは屋根土や壁土の崩壊土の可能性である。これは中世竪穴が規模を異にしながらも、構造は基本的に同じであるということでもある。屋根や壁に塗り込められた土壁（つまり均質に練られた壁土）の崩壊土こそ黒褐色土と黄褐色土ブロックの混合土と解したい。

## 2) 方形居館の構造

林前遺跡群の西端には、北辺を堀跡 S D 0104 で、東辺を S D 0190 で、さらに南辺を第14次調査 S D 06 で区画された方形館が造られている。西側は自然地形で旧天神川に臨む立地である。これまでの調査成果を総合すると、堀のプランは南辺がやや南側に開く形状を呈し、全体の規模は、東辺長が芯々で 63m、東西長約 60m である。堀の規模は、上幅約 3 ~ 4m、堀底で 0.3 ~ 0.6m、深さ 1 ~ 1.8m 前後である。堀跡の断面は一部箱築研状を示すが、全体的には外側の傾斜の緩い箱堀状を呈する。南辺堀西寄りの内部は一度くびれて段差をつけた仕切り造構となる。方形館の堀跡に仕切り造構を有し、それが仕切り造構自体の化粧性（装飾性）を示すことについては、仙人西遺跡で指摘したが<sup>25)</sup>、林前館跡についても同様のことがいえる。中世方形居館の性格を考える上で、堀跡の化粧性は見逃せない特徴の一つであろう。

堀内部には総数 20 棟前後の掘立柱建物跡と井戸跡があり、建物跡は方位、柱間寸法などから群毎に大別 3 期、4 小期に分かれる。中心殿舎は不明であるが、建物跡は 1 間 × 3 間、1 間 × 4 間、2 間 × 2 間、2 間 × 3 間、2 間 × 4 間、3 間 × 4 間の構造をもつ。堀外縁部には中世竪穴や井戸跡、小規模掘立柱建物跡などが付随する。堀跡からは中世前期の遺物が出土しているが、すでに指摘されているように<sup>26)</sup> 15 世紀以降の年代が考えられる。

25) 伊藤博幸・池田明朗『仙人西遺跡』(水沢市埋蔵文化財調査センター 1997)

26) 高橋千晶・佐々木千鶴子『水沢遺跡群範囲確認調査—平成 8 年度発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第 31 集 (水沢市教育委員会 1997)

# 報告書抄録

ふりがな	はやしまえみなみだてあと							
書名	林前南館跡							
副書名	市道秋成本線建設に伴う緊急発掘調査（第17、18、20、21次調査の報告）							
卷次								
シリーズ名	水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	佐藤良和・伊藤博幸・佐々木志麻							
編集機関	(財)水沢市文化振興財団 水沢市埋蔵文化財調査センター							
所在地	023-0003 岩手県水沢市佐倉河字九蔵田 96-1 TEL 0197-22-4400							
発行年月日	西暦 2003年3月22日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東緯	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
所収遺跡名	所在地							
注記：本表は各遺跡ごとに複数の表で構成 林前南館跡	市町村 真城字 向畠地内	市町村	遺跡番号	39° 08' 00"	141° 09' 50"	19980903 19990225	3,000	市道建設
						19990701 19991109	1,330	
		3204	NE27-2202			20010403 20011218	2,150	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
林前南館跡	集落跡	17次 平安時代	竪穴住居跡 2基 掘立柱建物跡 5棟 溝跡 28条		石器	平安時代の『九字』 資料（土器線刻）の 出土		
		18次 平安時代	竪穴住居跡 1棟					
		20次 平安時代	焼土遺構 1基 竪穴住居跡 2棟 堀跡 1条		土師器			
		中世	竪穴住居跡 2棟 井戸跡 1基 掘立柱建物跡 2棟					
	中世城館跡	21次 縄文時代	Tピット 21基 竪穴住居跡 16棟 土壤跡 25基 井戸跡 1基 溝跡 3条		須恵器	中世方形居館の調査		
		平安時代	掘立柱建物跡 1棟 土器溜り 1基 堀跡 1条					
		中世	井戸跡 1基 溝跡 1条 掘立柱建物跡 20棟		灰釉陶器			

水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第16集

## 林前南館跡

平成15年3月22日 発行

編集／発行 財団法人水沢市文化振興財団

水沢市埋蔵文化財調査センター

〒023-0003 水沢市佐倉河字九蔵田 96-1

電話 0197-22-4400

FAX 0197-22-4600

印刷 あべ印刷株式会社